
アジとサンマとクローバー

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アジとサンマとクローバー

【Nコード】

N1172Y

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

突然の兄の訃報を母から受けて小笠原に行くと
幼い女の子が泣きながら抱き着いてきた
それが全ての始まりだった

ブローグ

「しかし、暑いな……」

それが正直な気持ちだった。

東京では心地良い秋風がそろそろと吹こうかと言つ9月の終わりのに、ここは未だ夏の名残と言うよりは……

竹芝桟橋から船で揺られる事25時間半。

船はゆつくりと港に接岸しようとしている。

港には人や荷物を待ちわびた人が集まりにぎわっている。

6日に一度しか船は来ない。

どんな僻地かと思うかもしれないが住所的には東京都となっている。ため息を漏らしタラップを重い足取りで降りていく。

「パパ！」

少し離れた所から小さな女の子の声が桟橋に響き女の子が走り出した。

単身赴任か仕事の都合で離ればなれになっている父親との再会だろう。

辺りを見渡すと沢山の観光客に交じり見るからに仕事関係の人だろうと思える姿の人が見て取れる。

小さな女の子の声が泣き声に変わり。

足に小さな衝撃を受ける。

驚いて見下ろすと花柄のノースリーブの白いワンピースを着た女の子が俺の脚にしがみついて泣きじゃくっている。

潮風が吹き抜け女の子の色素の薄い肩まで伸びている髪が風に舞った。

島に

それはお袋からの一本の電話から始まった。

俺は一応アパレル関係の会社で営業の仕事をしている。

一応と言うのは俗にいう窓際族なんて呼ばれている部類に含まれているからだ。

人件費削減や経費削減が叫ばれている中で、営業成績も下から数えた方が早く定時に出勤して定時に退社する様な俺が会社に残っているのが自分自身でも不思議に思う。

が、決して転職なんて考えた事は無い。

就職難のご時世にぬるま湯に浸かっていられる幸せを噛み締めていたいからだ。

「おい、沢渡。沢渡典彰君、2番に電話だよ」

「すみません」

上司である水野課長に言われ机の上にある電話の受話器を取り点滅している2の番号を押すと沈んだ様なお袋の声がした。

「ノリちゃん？」

「お袋、会社でノリちゃんは止めてくれ。何か用か？」

本来なら携帯に掛けてくれば用は済む事だが、俺が実家からの電話に殆ど出ない事を見越して会社に掛けて来たのだろう。そしてお袋の口から信じられない言葉が発せられた。

「宗ちゃんが死んだ」

「はあ？ 何の冗談だ。昨日の夜に電話で喋ったばかりだぞ」

「修理中のアンテナの資材が落ちてきて宗ちゃんに……」

「おい、お袋！」

受話器の向こうでお袋は泣き崩れてしまった。

これ以上お袋から事情を聴くのは無理だと判断し、一旦通話を止めて昨夜掛ってきた履歴から宗一の携帯を呼び出す。

すると機械的な声で電源が入っていないか電波の届かないと告げら

れた。

堪らず営業部を飛び出して唯一テレビのある社員食堂に駆け出していた。

廊下を重い足取りで営業部に戻る。

握りしめた携帯が着信を知らせ友人や知人から宗の事を告げられ、真実を受け入れる前に何度も再認識させられた。

営業部に戻り課長に事の次第を告げる。

「沢渡君、急に如何したんだ？」

「すいません。取り乱して実は仕事中の事故で兄が亡くなりました」

「何と言えば良いか。こっちの事は任せて早く帰りなさい、総務には忌引の手続きをしておくから。確か君のお兄さんは小笠原で」

「はい」

「それじゃ時間が掛るだろう。戻ってきてから有給の手続きが出来るように取り計らっておくから」

「ありがとうございます。それじゃ失礼します」

自分のデスクに戻り同僚に頭を下げて営業部を後にする。

昨夜の宗一からの電話は突然の物だった、虫の知らせと言うやつか。電話では何か煮え切らない奥歯に物が挟まった様な感じで、何かを俺に相談したかったのかもしれないが今はもう聞く事すら出来ない。後ろから同僚が課長に抗議している声が聞こえてきた。

「課長、何で沢渡を庇うんですか？ あんな営業部のお荷物なんて」

「それじゃ、君は沢渡君が作った記録を塗り替える事が出来るのかな？」

「それは…… それにそんな記録さえ本当か」

「四の五言わずにそれを越えようとする事がひいては当社の成長を促すのでは？」

「判りました。あんな記録無理だろう、勝ち逃げ野郎が」

会社から直で兄の家に向かう。

兄の家は新興住宅地の中にある小綺麗な一戸建てだった。
表札に能登島の名前がある。

インターフォンを鳴らすと兄の愛娘である可奈ちゃんドアを開けてくれた。

「ああ、ノリだ。ママ、お婆ちゃん、ノリが来たよ」

姪の可奈ちゃんの声でお袋が出迎えてくれた。

「意外と早かったのね」

「あのな、電話口で泣き崩れたお袋が言う言葉か」

リビングに行くと兄の奥さんである一つ年上の美紀^{みのり}さんが放心状態でソファに座っていた。

「今、お茶でも」

「冷たいのをくれよ、喉がカラカラだ」

「はいはい」

こんな時にはなんて声を掛ければいいのだろう30年生きて来ても戸惑ってしまう。

大丈夫の筈も無ければすっかりしてとも言えずだんまりを決め込むしか出来なかった。

全く現実味が無く平坦な時間が流れている。

それはあまりにも遠い場所で起きた事だからだろうか。

ニューヨークまで12時間ちよいハワイまでなら7時間で着いてしまう。

それなのに兄貴がいる場所は日本国内なのに25時間以上かかってしまう。

「ノリは何時まで居るの？」

「可奈ちゃん……」

「はい、冷たい麦茶」

「サンキュー」

お袋が持つてきてくれた麦茶を一気に喉に流しこむ。

可奈ちゃんは何も判らずに俺の横に座り嬉しそうに足をブラブラさ

せていた。

お袋と俺が遊びに来たと思っっているのだろう。

確かに6歳の子どもに父親が死んだなんて理解できないだろうし、ましてや父親と毎日顔を合わせていた訳じゃない。

単身赴任先で死んでしまつて死に顔さえ見る事は不可能だったのだから。

「典彰君、来てくれたんだ」

「義姉さん、当たり前でしょ」

「そうだよ。何だか実感が無くて悪い夢を見ているみたいで」

ここにも夫の死を受け入れられない人がいる。

理由は可奈ちゃんと同じ様なものだろう。

「お袋、義姉さんの両親は？」

俺の問いにお袋は何も言わずに首を横に振った。

美紀さん^{みのり}の方の家族とはほぼ絶縁状態になっている。

時々美紀さんが近況を電話で報告していると聞いた事はあるけど年下の兄と結婚話が持ち上がった時に反対され、美紀さんが半ば強引に兄の所に転がり込むように結婚してしまった。

その事に責任を感じた兄は能登島の姓を受け継いだ。

「ノリ、あんたが島に行つてきなさい」

「はあ？ お袋は何を言っているんだ？ 会社は？」

「忌引と有給を引つ付ければ良いじゃない。あんたが行かなきゃ誰が宗ちゃんを迎えに行くの」

「典彰さん、私からもお願いします」

「美紀さん……」

美紀さんは極度の乗り物酔いをするので1度だけ島に可奈ちゃんを連れて行った時には大騒ぎになった。

お袋が親父がと思ったが美紀さんがこの状態じゃお袋は無理だし、

親父は……も無理か。

押し切られる様に自宅に戻り準備を始め、パソコンで島までの経路を調べてみる。

「船って6日に1便……」

慌てて船会社に電話して俺は船上の人になった。

青天の霹靂

「これ、昴！ その人は……」

俺の脚にしがみついた女の子の後を慌てて数人の作業着姿や近所の人だろつかが追いかけてきている。

「あんたが宗一さんのかい？ それにしても昴が勘違いするのも仕方がないか」

「能登島宗一の弟の沢渡典彰です」

「あら、苗字が違うね」

「兄は婿養子に行ったので」

「で、単身赴任かい？」

「まあ、兄は大好きな仕事に着けたのですから本望だと思いますよ」

職場の人や近所の人に連れられて兄が暮らしていた家に向かう。

兄は茶毘に付され葬儀は滞りなく職場の同僚達の手によって執り行われた後だった。

近くに兄の家族が居ないのが現状でましてや船は週一しかないのだから、いつ家族が来られるか判断しようが無かったのだろう。

仕方がないで片づけたくはないが今は飲み込むしかなかった。

そして俺の脚にしがみ付いていた女の子は片時も俺から離れようとしなかった。

「あの、つかぬ事を聞きますがこの子は？」

「何を言っているんだい。宗一さんの娘さんの昴ちゃんじゃないか」

「はああ？」

思わずその場から逃げ出したくなった。

人の死なんていつ訪れるか誰にも判らないしこの世の中に終わらないものなんて無いと思っている俺ですら兄の死以上に受け入れがたい言葉だった。

「しかし、見れば見るほど宗一さんにそっくりだね。だけど宗一さ

んの方が優しそうだけど」

「まあ、一卵性の双子ですし良くある話で出来た兄と出来の悪い弟でしたから」

兄は出来過ぎるくらいだった。

頭も良いし誰かれなく優しく出来る人間で、唯一と言えば人が良すぎる所が今の世知辛い世の中じゃ欠点なのかもしれない。

それに対して俺はと言うと若干兄より運動が得意だけで常に兄と比べられた。

それに嫌気がさして兄がしない様な悪さは全てやってきた気がする。タバコ、酒、喧嘩etc

自慢できる事じゃないが補導や前科が無いのが唯一の自慢かもしれない。

お蔭で一応大学も卒業出来て今の会社に入る事も出来た。

大学に行ったのは親のたつての願いだったからで俺自身が行きたかったかと言えば嘘になる。

現にバイトや遊びに明け暮れて単位もギリで卒業を切り抜けた。

一方の兄は成績も優秀、推薦で自ら望む大学に行き自分のやりたい事に打ち込んで、希望通り国立天文台の技師になり念願のオレンジペペで仕事が出来るようになった。

俺たちが高校の頃から兄貴と美紀さんは付き合っていて、兄貴が大学を卒業と同時に結婚して可奈ちゃんが生まれ幸せな家庭だと思っていた。

そんな兄に可奈ちゃんと同じ年の隠し子が居たなんて青天の霹靂だった。

そして彼女の名前の昴も星や月が大好きだった兄なら頷ける。

近所の人に聞いても娘だと信じて疑わず、俺自身も言い出せなる雰囲気じゃなかった。

「宗さんが島に来た時には奥さんも一緒だったけど時々フラと居なくなる事が多くてね、もともと不思議な感じの人だったけどね。」

ある日、フラツと帰って来なくなっただよ」
そんな事を兄の仕事中に昴の面倒を見ていた近所の人と話してくれた。

集落から少し離れた町明りがあまり届かない様な場所に兄が暮らしていたコンクリート造りの平屋建ての小さな家があった。

玄関の前で小さな何かが動いている。

「何だ、このチビっこいの」

「チビちがう。サン」

「どう見てもチビだろう」

昴が名前を覚えてくれた子犬は生意気な事に俺に向かって全身で威嚇していつちよ前に牙を剥いている。

「小さいのに生意気だぞ」

俺がしゃがみ込んで斑な狼の様な毛色の子犬に手を出そうとすると近所の人に止められてしまった。

「やめときな、沢渡さん。その子犬は昴にしか懐かないんだ。宗一さんでも梃子摺っていたんだから」

「余所者の俺じゃ駄目ですかね。やっぱり」

「多分、獵犬の血が入っているから主人以外には攻撃的なんだと思うよ」

「へえ、獵犬ね」

子犬の前にしゃがみ込むと背中の中毛を立てて今にも飛び掛かろうとしていた。

獵犬らしく俺の目をジッと睨みつけている。

俺が目を逸らした瞬間を逃さない為だろう。

目を逸らさずに静かに掌を犬の前に差し出す。

「沢渡さん、危ないよ」

「大丈夫」

静かに子犬の鼻先に指先を近づけた。

周りでは固唾を吞んで見守っているのだろう、昴は怖いのか俺の背

中に隠れる様になっている。

子犬とは言え指先を噛まれればそれなりの怪我をしてしまうだろう。静かに息を吐き出すと子犬が唸るのを止めた。

そして俺の指先の匂いを嗅ぎ始めると周りから驚きの声上がる。

子犬が俺の指先を舐めていた。

「お前が昂を守っていたんだな、よしよし」

子犬の口を掴むと前足で俺の手を退けようとしている。

今度は首元に手を入れ子犬をひっくり返すと甘噛みをしてジャレついて来た。

俺に対しての警戒心はもう何処にも無いようだ。

「サン！」

昂が子犬の名前を呼ぶが遊ぶのに気を取られて反応しなかった。

「サン、ご主人様が呼んでるぞ」

俺がそう言つとクルンと体を起こして顔を上げてお座りをした。

「良い子だ」

「いいこ、いいこ」

昂がサンの頭をなでるとクンクンと鼻を鳴らし始めた。

近所の人の話ではサンは栈橋で観光客などに噛みついたりして危険だと言つ事で捕獲される事がきまり島の人捕まえようとしたらしい。

子犬が栈橋に居ると言つのを聞いて兄貴と見に来ていた昂は追い詰められたサンを見て突然駆け出してサンを抱きしめてそれ以来兄貴が責任を持つて飼う事になったと話してくれた。

昂に子犬、どれだけ兄貴は優しいと言つかお人よしと言つか。

で、自分はあつという間に空に昇つて尻切れ蜻蛉だよ。

兄の暮らしていた家で帰りの日まで寝泊りする事にした。

その方が荷物の片づけや何かと都合が良いからで、昂はと言つと近所の人が『しばらくは、おばちゃんの家でね』と言つ言葉にがんと首を縦に振らなかった。

今は兄の前で静かに寝息を立てている。

その横でタバコを吸う訳にもいかず表に出て星空を眺めながら一服していた。

「いくら星が好きだからって自分が星になってどうするんだよ、馬鹿兄貴」

頭の上には満点の降る様な星空が広がっている。

子どもの頃に兄貴が嬉しそうに星々の名前や星座の由来を教えてくれたのを思い出す。

すると俺らと同年くらいの男性が声を掛けてきた。

昼間に出迎えてくれた作業着姿の人だった。

「こんばんは、沢渡さん」

「あなたは確か天文台の」

「安曇あずみつて言います。能登島とは同期で」

「そうですか。で、こんな夜更けに何か？」

「いえ、近くを通ったら姿が見えたので少し話がしたいと」

「もしかして、昴の事ですか？」

思っていた事をそのままぶつけてみた。

「ええ、どうしてそれを」

「近所の人は知らないようですが天文台の職員が知らない訳はないだろうと思っていましたから」

「そうですか、そうですよね普通。実は能登島から周りに話さないように言われていたんです。僕ら自身も本当の事は良く知らなくてただ現実を見ると昴ちゃんの母親は行方知れずで能登島しか昴ちゃんを守る奴が居なくて」

安曇さんの話は昴が兄貴の本当の子どもかまでは知らず、ただ東京に奥さんと娘がいる筈なのにと感じていたらしい。

兄貴から話すなど言われていたならば仕方がない事だし、仲間としては不要な噂が小さな島で広がるのを恐れたのだらう。

そんな事になれば島を去らざる負えなくなる事態になるかもしれないからだ。

昂が能登島の姓だと言う事は兄貴の籍に入っているのだろう事が容易に想像つくが、美紀さんやお袋にどうやって話すか考えるのは容易な事ではなかった。

だが判っている事は昂を連れて帰る以外に選択肢が無い事、そこから先は話し合いで決めるか最悪は施設に預ける事になるだろう。そしてもう一つ。

昂は兄貴が生きていると思っているのかもしれないと告げられた。アンテナの修理中に足場の鉄骨が崩れ兄貴の頭部に直撃し即死の状態で昂に合わせられる状態ではなくそれ故に兄貴が船で帰ってくると思っていられない。

そこに兄貴とそっくりな俺が船から降りてくればあの状況も頷くしかなくそれが本当の話なのだろう。

翌日からサンの散歩と荷物の整理を始める。

昂は兄貴が帰ってきたと勘違いしているのか泣く様な事も無く近所の子どもと遊びに行ってしまった。

荷物の整理をしながら俺は昂の母親の手掛かりを探す事になるが、殆ど見つけ出す事は出来ずに時間だけが過ぎていく。

状況を知りたいお袋から電話が掛ってきた。

「ノリ、そっちはどうなの？」

「兄貴の荷物を毎日片づけているよ。まあ几帳面な兄貴だから手間は取らないけど帰りの船はまだ数日先だからね。とりあえず兄貴だけでも連れて帰るよ」

「そう、お願いね。それと宗の事だから浮気なんかしてなかったと思うけど」

「ばーか。真面目を絵に描いた様な兄貴に隠し子でも居て見る腰を抜かすだろうが。でも子犬が居ただけだな」

「あんたと違って手の掛らない子だったからね。でも犬は駄目よ怖いし苦手だから」

「判っているよ」

冗談交じりにワンクッション入れておく。

帰りの船を翌日に控え片付けは大方終わっていた。

仕事の資料などは天文台の方に引き渡し兄貴が使っていたパソコンや必要だと思われる物を段ボールに詰め昴の着替えも少しだけ俺のバックに詰め込んで残ったものは処分してもらう様に頼んだ。

「昴、そのカメラを取ってくれないかなあ」

「……」

昴の近くにあったカメラを取ってもらおうと声を掛けると昴が俯いて首を横に振っている。

出会って間もない所為か少しは慣れていたつもりなのに昴との距離を感じてしまう。

仕方なく立ち上がり自分で取に行き梱包する。

小さな島だけに家電などは直ぐに引き取り手が決まったようだ。

「おはよう、荷物は片付いたかい？」

「どうも。おはようございます。おかげさまで昼過ぎまでゆっくり出来ました」

「今日はどうするんだい？」

「殆ど島を見ていないので島内を見て回ろうかと」

「そうかい。じゃバイクを貸してあげるから昴ちゃんに案内してもらいな。昴！ おじちゃんのバイクの鍵を持ってきた。沢渡さんに島を見せてあげるんだよ」

「はい！」

威勢のいい近所のおばさんに圧倒させられる。

昴が元気よく返事をして近くの民家に飛び込んでいく、それを見計らっておばさんが話しかけてきた。

「こんな事を私が言うのは変かもしれないけど、本当のところ宗さんには本土に家族が居るんだろ。お願いだから昴ちゃんを泣かせる様な事はしないでくれ。私達も薄々は気づいていたんだよ、でも昴ちゃんには宗さんしか居ないんだから、本当をお願いだよ。あん

な良い子の泣き顔なんて2度と見たくないんだ」

「自分出来る事なら精一杯しますよ。ただ今言えるのはこれだけです。でも、昴の事を一番に考えてやりたいと思います」

「そうだね。そうだよね。家族が居るのな難しいよね」

そこに満面の笑顔でぶかぶかのヘルメットをかぶりバイクの鍵を差し出している昴が駆け寄ってきた。

「ほら、あそこのバイクで行ってきな。遠慮なんかしたら承知しないよ」

「それじゃ遠慮なくお借りします。昴、行くぞ」

「うん！」

昴からヘルメットを受け取り頭に乘せてバイクのエンジンをかける。

「ヘルメットのひもはちゃんとしなないといけないんだよ」

「はいはい」

「もう、おへんじは1回でしょ。それとサンもいつしょ」

「へいよ」

注意する時の昴の口調は几帳面で生真面目な兄貴そのものだった。

昴がサンを連れて来たので片手で掴んで持ち上げサンの顔を見た。

「しかし、子犬の癖に目つきの悪い犬だな」

「かわいいの」

「はいはい」

サンをバイクの前に付いているかごに入れリードを手に巻きつけてハンドルを握る。

「乗れ、行くぞ」

「うん」

俺の後ろに乗るのかと思えば昴が俺の腕をくぐりステップに立ちハンドルに手を置いた。

「いかないの？」

「行きますか」

道なりに進んでいると昴が進むべき方向を示してくれる。

一言で言うつと海と山しかない島で僅かな海岸線に集落がへばり付くように点在している。

手付かずの自然と言う物なのだろうか。

流石、小笠原ブルーと絶賛されている海は澄んで綺麗だった。

半日もバイクで走ると島中を見て回れてしまうほど小さな島でのんびりするには良い所なのかもしれないし、一度来てしまえば1週間は帰れない島なのだから。

眼下に広がる海に太陽が沈んでいく。

見晴らしのいい展望台には心地良い風が吹いていた。

サンと言えば大人しく昴の横で伏せている。

珍しい事にサンが鳴いたのを聞いたことが一度も無かった。

「昴、島に残りたいか？」

「わかんない。でも、おじさんはパパににているけどパパじゃないんでしょ」

「どうしてそう思うんだ？」

「タバコのおいがするから」

「そうか、一緒に東京に行ってみるか」

「うん。とうきょうってここよりのしい？」

「昴、次第かな」

情けない事に6歳の女の子にそんな返答しか出来なかった。

とりあえず東京に戻りこれから先の事を考えてやらなければならぬのは確かだけど俺だけで決める事も出来ず。

荷物を後日送ってもらう為の段取りを決めて俺の連絡先と住所を告げて島を離れた。

サンは連れて行く訳にも行かず近所の人が預かってくれる事になった。

いざ島を船が離れていくと昴に気付いたサンがキュンキュンと必死に鼻を鳴らしていたが昴は泣き出す事もなくジッとサンの姿を見つめて何かに耐えている様だった。

やくそく

昼過ぎに島を出て翌日の夕方に竹芝桟橋に到着する。

お袋の話では美紀さんが落ち着いてから葬儀をしようと言った事になっていて兄貴を家に連れ帰るのが最優先だからと言われていた。

昴は船の中でも旅行を楽しむかのようににはしゃぎ回っていたが能登島の表札がある兄貴の家の前に来ると俺のズボンを掴んで俯いてしまった。

この場に連れて来るべきか迷ったが俺には昴を預かってもらえるような場所など思いつかないし昴自身もそれを望まないだろうと思った。

「戻ったぞ」

「ご苦労様。大変だったでしょ」

「まあな、色々と疲れたよ」

「典ノリ、その子は？」

「とりあえず座らせてくれ。お袋、美紀さんは？」

「奥よ、大分落ち着いたわ。こればかりはね」

「そつか。行くぞ、昴」

落ち着いたと言うより実感が無さ過ぎてどうして良いのか判らず数日が過ぎてしまったのだろう。

離れてい暮らしていた家族にはあまりに突然でなんと酷い事だと思ふ。

すると幼馴染で従妹の春菜がひょっこり顔を出した。

春菜もショックを受けているに違いないのに普段と変わらないように見えるのは気を張っている所為なのだろう。

「お帰り、典兄」

「春菜か、久しぶりだな」

「まあね。その子って典兄の彼女の訳ないわよね」

「あんな、俺にはそんな趣味はねえよ。丁度いいや、春菜。可奈と

上で遊んでいてくれないか美紀さんとお袋に大事な話があるんだ」
「うん、判った。可奈ちゃん、お姉ちゃんと上で遊ぼう」

「はい」

春菜が手伝いに来てくれていて丁度良かった。

可奈と春菜が階段を上がっていくのを確認して昴の手を取り美紀さんが待つているであろうリビンググに向かった。

「兄貴を連れて帰ってきたよ」

「ありがとう、典彰君」

美紀さんに兄貴を手渡すと愛しそうに奥の部屋に運んで行った。

その間にお袋が冷たい麦茶を入れてくれた。

何から話せば良いのか戸惑うがここまで来たら話すしかない事で、包み隠さず俺が知りうることをきちん伝えてこれからの道筋を立てるしかない。

ソファーに腰を下ろすと昴が俺の横に座り俺のシャツを掴んで俯いている。

「典彰君、その子は誰なの？」

「美紀さん、お袋。この子は島で兄貴と暮らしていた能登島 昴だよ」

「の、典はこんな状況の時に何を言っているか判って言っているの？」

「こんな時じゃなきゃ何時話せば良いんだよ」

「あんたって子はどうしてそんな子を何の相談も無しに連れて帰ってきたの？」

「それじゃ、どうすれば良いんだよ。昴は兄貴と2人暮らしたったんだぞ」

「だからって何も。美紀さん、大丈夫？」

お袋が心配そうに美紀さんを気遣っている。

「典彰君、それは本当なの？」

「昴が能登島の姓を名乗っていると言う事はそういう事です。でも、

本当の事は現状では兄貴以外に知る人はいません」

「宗と2人暮らしてこの子の母親はどうしたの？ 可奈と同一年ぐらいの子を置いていくなんでどうせロクな母親じゃないでしょうけど」

「お袋、昴の前でそんな事を言うのは止めてくれないか。何も判らない今はそんな事は問題じゃないだろ」

「何で典彰君がこの子を庇うの？ この子は私と可奈が知らない所で一緒に暮らしていたんでしょ！ 私と可奈がどんなに寂しい思いをしてきたか…… そんな時にこの子は！」

無意識に隣に座っている昴の頭を抱える様に抱きかかえていた。

グラスが割れる音がしてテーブルに真つ赤な血が数滴落ちて白いレースのクロスに沁み込み赤く染めていく。

それはダムが決壊するかのように美紀さんが堪えていた感情を爆発させた瞬間だった。

『この子は』に続く言葉は感情に吞まれて何を言っているのか判らなかった。

昴は俺のシャツを握りしめてジツと何かに耐えている。

流れ出る血が左目に入り目を開けていられない。

美紀さんの声とグラスの割れる音に驚いて春菜が2階から駆け下りてきて、俺を見るなり直ぐにタオルを持ってきてくれた。

「可奈ちゃんは上に居なさい。降りてきちゃだめよ。典兄、大丈夫そうじゃないわよね」

「平気だ、ただのかすり傷だよ。夜だし切った場所が場所だけに血が止まりづらいだだけだ」

「とりあえず病院にね」

「そうだな、昴は……」

俺の腕の中に居る昴を見ると小さく怯えながら首を横に振っている。この場に置いていくのは難しそうだ。

美紀さんはお袋に抱きかかえられて泣き崩れている。

「典……」

「おふくろ、俺の事は気にしないでいい。義姉さんを頼む。泣きただけ泣かせてやれば少しは落ち着くだろう。一応病院に行つてここに帰つてくるから」

「判つたわよ、勝手に帰るのは無しよ」

春菜が持つてきてくれたタオルで傷口を押さえタクシーで病院に向かう。

「お大事に」

目の上、丁度眉毛の辺りを切り4針縫われてしまった。

驚いた事に消毒も無ければガーゼも傷口に当てず、流水で傷口を綺麗にして麻酔をして縫合したらフィルムの様な物を張られ『いらな』と思うけど』一言付で包帯を巻いてくれた。

更に驚いたのは風呂に入つて髪の毛を洗つても良いらしい。

医療の進歩と言う奴なのだろう。

診察室に入ろうとした時に昴が俺から離れずに愚図り看護師さんが宥め賺してくれた。

治療を終えて診察室を出ると看護師さんが昴に付ききりで居てくれたようだ。

「有難うございます。お手数をおかけしました。ほら、昴。看護師さんにお礼を言つて」

「ね、パパが戻つてきたよ。もう大丈夫だからね」

看護師さんのお姉さんが優しく声を掛けたのに昴の瞳からは大粒の涙がこぼれた。

「ノンも、しんじやうの？ あたまからいっぱい血がでてしんじやうの？ いなくなちゃうの？」

昴がしゃくり上げながら泣きじゃくっている。

迂闊だった病院に連れて来た事をこの時ほど後悔した事はない。

無理にでも春菜に預けて来るべきだった。

もしかして昴は事故現場か事故後の兄貴の姿を見ていたのかもしれ

ない。

「大丈夫、パパは死んじゃったりしないからね」

「だって！　パパはあたまからいっぱい血をだしてなくなっちゃったんだもん！」

看護師さんが昴を安心させようと声を掛け、昴の言葉に事情を知らない看護師さんは動揺を隠せないで俺と昴の間を視線が泳いでいる。ゆっくりとしゃがみ込み昴の涙を指で拭う。

「昴、俺は死なないよ」

「ほんとう？」

「ああ、死なない。それと絶対に昴を置いていなくなるなら、約束する」

「やくそく？」

昴の小さく細い小指を俺の小指に絡める。

「ゆびきりげんまん　嘘ついたら絶対はりせんぼん全部飲んでやるゆび切った」

指切りをした瞬間に昴の小さな体が両手を広げて俺の中に飛び込んできた。

薄暗い病院の廊下に昴の泣き声だけが響き渡った。

こんな小さな体にどれ程の哀しみを押し込めていたのだろう。

突然、目の前からいなくなってしまった父親。

可愛がっていたサンとの別れ。

そして大好きな島の人がない孤独。

昴を抱きしめる手に力が籠った。

兄貴の家に戻ると美紀さんと可奈は既に泣き疲れて床に入っていた。

そして昴も俺の背中では泣き疲れぐっすりと眠っていた。

昴をリビングのソファに寝かせその横に腰を下ろす。

目の前には思案顔のお袋が暗い影を落としている。

「で、ノリは昴ちゃんをどうするの？　可哀想だけど施設に入れた方が」

「いや、俺が昴と暮らす」

「そんなに簡単に決められる事じゃないでしょう」

「簡単だよ。昴と約束したんだ、俺は何処にも行かないって」

「あんた、子育てをなんだと思ってるの？ 簡単な物じゃないのよ」

「やってみなきゃ判らないだろ」

「やってみて駄目だからなんて訳には行かないのよ」

「それじゃ、お袋が預かってくれるのか？」

「む、無理に決まってるでしょ」

「絶対に施設なんかには渡さないし、昴の母親を探してみる」

「あんたね」

「おばさん。こうなつた典兄は梃子でも動かないわよ」

春菜が俺とお袋の間に入ってくれる。

昔から春菜はこんな感じの役柄だった。

「典兄は直観重視の結果オーライの野生児で宗兄は何事も計算ずくで結果を導き出す学者肌だったからね」

「俺は猛獣か何かか？」

「だって何とかなるって思っているんでしょ？ それに典兄の頭の中には保育園なんて頭にないでしょ。典兄が仕事の時に昴ちゃんはとうするの？」

春菜の言葉に返す言葉も無い。

「これから探すさ」

「あきれた。それで良く昴ちゃんを育てるなんて言えるわね」

お袋が叩き込みにかかってくる。

ぐうの音も出ない俺に春菜が何かをプリントアウトした紙を俺の目の前に突き出した。

「どうせそんな事だろうと思っていたわよ。はいこれ、とりあえず典兄の近くの緊急一時保育をしている所だよ。それと私に約束してきちんと役所に相談に行つて保育園を決める事。出来る？」

「ありがとう。悪いないつも」

「素直で宜しい。『ありがとう』って直ぐに言えるのは典兄の良い所だからね」

「しょうの無い子だね。何かあったら必ず連絡するんだよ」
何も変わらない昔からの構図がそこにあった。

緊急一時保育は保護者の都合つまり出産や病気などで保育できない時に一時的に預かってくれるシステムらしい。

とりあえず一時保育で昴の面倒を見てもらっている間に正規の保育所を探さなければならぬ手の掛らない宗一に比べ俺は周りに迷惑ばかりかけて生きてきた。

でも、春菜はどんな時でも手を差し伸べてくれてお袋も嫌な顔をしながらでも必ず助けてくれた。

朝、目が覚めてあんな事があった家にいる事が判れば昴は怖がるだろうし、今の状態では美紀さんの精神的にも好ましくないだろう。

心根は本当に優しい人だから時間だけが何とかしてくれるだろうが

兄貴の葬儀が一段落するまでは無理だと思う。

昴を一番に考えてやる事しか俺には出来ない。

だから俺の家に昴を連れて帰る事にした。

アジ、アジ。サンマ〜

「ノン、おきて。おなががすいた」

「ノンってばあ」

小さな手で誰かが俺の体を揺り動かしている。

「ん？ 昂か？ おはよう」

「ノン、おながすいた」

「あいな、昂。最初が肝心だから言っておくけど俺は典彰という名前でお袋たちからは『ノリ』って呼ばれているけど『ノン』じゃなくて『ノリ』だ」

「だって。ノンとゆびきりした！」

昂が口を尖らせ顔がどことなく寂しげに見える。

「ん〜 そんな顔をするな。好きなように呼べ。もうノンで良いから」

「うん！」

一気に昂の顔が明るくなり、内心わざとやっているのかと思ってしまった。

嫌いじゃないが基本的に子どもが苦手で、女なんて何を考えているのか判らない生き物だと思っている。

そんな俺の隣には最強な生き物が居るのかもしれない。

「朝飯か、何にもないな」

1週間ほど家を空けて小笠原から帰ってきた翌日に冷蔵庫の中の食材が生きている筈もなく、どうするか考えてしまう。

近くのコンビニかそれとも駅前早朝営業しているファーストフードか……

時計を確認すると10時を回っている。

俺も昂も余程疲れていたのだろう。

昂はそんな事はものともせず俺の家の中を探検し始めた。

「うわあ、きのお家だ。ん〜ん、ノンひらかないよ」
「ほいほい」

縁側にある大きなガラス戸を小さな昴が必死になって開けようとしていた。

俺の住んでいる家と言うのは、今は亡き爺ちゃんが晩年暮らしていた家で木造平屋建ての一応庭付きの一軒家になっている。

間取りは2DKと言った所だろうか独り暮らしには十分な広さだった。

手直しをしながら暮らしているので所々にコツと言う物が必要になっていった。

鍵を開け窓の棧を持って軽く持ち上げるようにして開けると軋みながら窓が開き朝とも昼ともいえない太陽が顔を出している。

「うわあ、パパのお家みたいになにがある」

「まあ、猫の額ほどだけだな」

「あれはなあに？ ブロックじゃないの？」

「ああ、生垣だよ。ここじゃ小笠原みたいに年に何度も台風が来ないからな。それに生垣の方が風通し良くて涼しんだよ」

「ふうん。あ、ノンけいたいになってるよ」

「おう」

携帯を手に取り見ると春菜からだった。

寝起きの頭にハイテンションな春菜の声が響く。

「典兄、おはよー。久しぶりにデートしよう」

「デート？ あんな、彼氏の海自のタフガイはどうした？」

「昨日から訓練でしばらく会えないんだもん。もう駅前で待ってるから」

「はあ？ おい！ 切りやがった」

昴を着替えさせ俺もジーパンにパーカーを着てと思っていると昴がきちんと正座をして何かを見ていた。

「ノン、これなあに？」

「それは音楽を聴く機械だよ。俺の爺ちゃんが大切にしていたレコ

ードを聞くんだよ」

「ノンのおじいちゃんのだいじ？」

「そう、だから触るなよ」

「うん」

興味津々で正座までして昴が見ていたのは真空管アンプとレコードプレーヤーだった。

それにしても昴はきちんとしていると言うかとてもしっかりしている。

兄貴と暮らしていた所為だろうか。

駅前に着くと春菜がトレーナーにサブリナパンツ姿で手を振っている。

そしてあるう事が春菜に隠れるように可奈が一緒だった。

「春菜、何を考えているんだ、頭が痛くなってきたぞ」

「ええ、典兄を買物に誘うっておばさんに言ったら可奈ちゃんも連れてけて。どうせ遅かれ早かれ顔を合わすんだからって、悪いのは宗兄で子どもたちに罪はないからって」

「どう説明するんだよ。腹違いの姉妹なんだぞ」

春菜に小声で言うのと直ぐに切って返してきた。

「典兄に任す」

「丸投げかよ！」

「とりあえず、可奈ちゃんも私も朝ご飯未だなんだよね」

「そつくりそのままお返しするよ」

「どうせ典兄の事だから近くのコンビニか朝マックで済ませる所だったんでしょ。食べるなら可愛い女の子に囲まれての方が美味しいでしょ」

「俺、女苦手だしって。痛っ！」

春菜と昴に絶妙なタイミングで脛を蹴られた、それを見て可奈が笑っていた。

早朝から開いているファーストフードで朝飯にする事にした。
駅前の立ち食いソバを押してみたが3人に速攻で却下されてしまった。

まあ、弱冠1名興味を示した小さい奴が居たけど春菜に丸め込まれた様だった。

事情を知らない可奈が同い年ぐらいの昴の事が気になるらしい。

「ノリ、その子って一緒に可奈のおうちにきた子でしょ」

「そうだよ、可奈。可奈とは凄く近い親せきになるかな。同い年だから双子の姉妹みたいな感じかもな。苗字も同じだし」

「そうなんだ。私、可奈。よろしくね」

「うん、私は昴だよ」

「へえ、変わったなまえだね」

「星のなまえなんだよ」

「ふうん」

昴はとても感が良く頭の良い子だった。

昨日の時点で何かを感じ取っていたのかもしれない。

子どもは難しい事を説明する言葉は知らないけれど噛み砕いて教える事でちゃんと理解してくれる。

俺ら大人が考えている以上に色々な事に気づき考えているのだろうと昴と一緒に過ごした僅かな時間ですらそんな事を感じ取る事が出来た。

島育ちの昴が恐らく初めて見るマフィンサンドを不思議そうな顔をして見ていると可奈がお姉さんぽく食べ方を教えている。

子どもってつくづく凄いと思うってしまう。

「で、買い物デートなのか？ 子連れ同士で」

「それじゃ典兄は昴ちゃん洋服のサイズを知っているの？」

「宜しくお願いいたします。春菜様」

「苦しゆくない、良きに計らえ」

「まあ、たまには春菜の服でも買ってやるよ。それが本命なんだろ」
「やったー」

従妹の春菜は宗一と俺にとって幼馴染だったがそれ以上に妹の様な存在だった。

そんな兄と慕っていた片割れの宗一が未だ30にしてこの世を立つてしまった、春菜も寂しくないはずがないのは俺が一番判る事だった。

4人で駅前にある大型衣料品店に向かう。

仕事柄で言えば敵に塩を送る様な感じになるが背に腹は代えられず俺が普段着にしているのも殆どがこの系列会社のカジュアルウェアだった。

「春菜、洗濯が面倒だか多めに選んでくれよ」

「はい」

春菜・昴・可奈が楽しそうに洋服を取っ替え引っ替え選んではかごに入れている。

実際問題としては昴と2人で来ていればこうはならなかっただろう。昴と可奈は本当に姉妹の様にはしゃぎ回っている。

大きくなって本当の事を知っても仲良くしていてくれる事をただ願うしか今は出来なかった。

春菜にワンピースを買ってやり女の子が好きそうなカフェに来ていた。

昴と可奈は楽しそうにお喋りしている。

都会を殆ど知らない昴にあれこれと教えてあげていると言う感じが本当に姉妹の様だった。

「凄いね、子どもって」

「そうだな、だけど本当の事を知った時にはどうなるのかな」

「それは私達次第じゃない。まあ、美紀さんによる所が大きいと思うけど」

「それは心配ないと思うぞ」

「何で典兄がそんな事を言いきれるの？」

「あん？ だって宗一が選んだ嫁さんだぞ」

「そっか、そうだね」

「しかし、居づれーなここは」

「うふふ、ノンちゃんだもんね」

「うるせえ」

まあ、後日何で俺がノンなのかなんとかなく判るのだが……

パステルカラーで統一されたような店内で春菜とチビ2人は問題ないが体の大きな俺が浮きまくっていた。

「そう言えば昴ちゃんはお家で何をして遊んでいるの？」

「んと、えほんをよんだりぬいぐるみであそぶの」

「へえ、本が好きなんだ」

「うん」

俺の殺風景だった部屋には昴の荷物として送った本や小物が彩りを添えはじめていた。

春菜と可奈と別れて昴の布団を買ってとりあえず自宅に戻り荷物を部屋に放り込む。

「疲れた」

「ノン、おなががすいた」

「って、おい。昴。さっきあんなにパフェやら何やら食べてただらう」

「だってあれはご飯じゃないもん」

「判ったよ、そんな顔するな。冷蔵庫には何も無いから買い物に行くぞ」

「うん！」

駅前まで再び出る事になった。

家から出ると昴が俺の手を掴んだ、何でも外は危ないからと春菜に教わったらしい。

俺が危ないのか？

駅前のスーパーでとりあえず野菜などをかごに入れる。

「なあ、昴は何が食べたいんだ？」

「おさかな」

「へえ？ 魚？ ハンバーグとか鶏のから揚げとかじゃなくて」

「うん、おさかながいい」

昴のリクエストに答えて鮮魚コーナーに行くと言の魚からお刺身まで色々と綺麗にパック詰めされて並んでいる。

「どれが良いんだ？」

この時期で言えばサンマか、アジの開きなんかも良いかもしれない。しばらく昴がショーケースの中を覗き込んで少し残念そうな顔をした。

「いない」

「はあ？ 魚が良いんだろ」

何も言わずに昴が小さく頷いた。

仕方なく今日のメインになるであろう魚以外の買い物を済ませて駅前通りにある商店街に向う。

確かここに魚屋があつたはずだ。

ガラスのショーケースの前に発泡スチロールに氷が入れられ沢山の魚と値札が付い並んでいる。

それを見た途端に昴の目が輝き始めた。

それは決してスーパーの鮮魚がどうと言う意味ではなく。

多分、島ではこんな感じの新鮮な魚を食べていたのだろう。

「どれにする？」

「え？ わたしがえらんでいいの？」

「良いよ、昴が食べたいんだから」

昴が魚を覗き込むように見ていると店主らしき人が出てきた。

「らっしゃい。へえ、お嬢ちゃんが目利きをするのかい？ 今日の良いサンマが入ってるよ」

昴が俺と同じ年くらいの店主の声なんか耳に入らないくらいの勢いで魚を覗き込んでいる。

「これが良い」

「へえ、感心するね」

「だってこのこたちが一番きれいだもん」

「よっしゃ、とっておきの天日干しのアジの開きなんかどうだいって、お嬢ちゃんが買う訳じゃないか」

店主がバツの悪そうに頭を掻いて俺の方を伺っていた。

「それじゃ、昴が選んだサンマを2尾とお奨めのアジの開きを2枚、お奨めなんですよね」

「当然でしょ。こんな目利きのできるお嬢ちゃんに嘘は付けないよ。脂がのっついてサンマもアジも最高だよ」

「それじゃ、帰ってから七輪で焼こうか」

「へえ、今時七輪なんて風情があるね」

「サンマは七輪でしょ。まあ、死んだ爺さんの受け売りだけどね」
魚屋の店主が腕組みをしてしきりに感心していた。

だいぶ日が傾いてきたので早めに帰る事にする。

「アジ、アジ。サンマ、サンマ、サンマ。アジ」

「そんなに魚が好きなのか」

「うん、おさかなはね たべるとあたまがよくなるんだよ」

「そうなんだ。まあ、何事もバランスが肝心だからな」

「ふうん」

「昴はサンマの苦い所とか大丈夫なのか？」

「うっ、ちょっときらいだけどおばさんやパパがちゃんと食べなさ
いって」

「そっか、じゃ今日は苦いの抜きで。俺も苦手だし」

「ほんとう？」

「本当、本当」

家に着くまで昴はアジとサンマの歌が何かをずっと口ずさんでいた。

爺さんが使っていた七輪を縁側にひっぱり出してきて炭に火をつけてみる。

まだ、現役でバリバリに使えそうだった。

俺が台所で食事の支度をし始めると昴が隣から覗き込んでいる。

今までは時々だが独りで作っていたので何だか昴の視線がこそばゆい。

サンマの頭の所にぐるっと切り込みを入れ、中骨を切りエラの下も切っておく。

そしてお尻の穴の手前にも切り込みを入れて頭を引っ張ると頭と一緒に内臓が綺麗に出てきた。

「うわあ、すごい」

昴が驚いた様に感心している。

たしか何とか家の食卓が何かでやっていた裏ワザだか何だかだと思う。

「昴も手伝ってみるか？」

「ええ、いいの？ パパはまだ小さいからダメだつて」

「まあ、包丁や火は危ないから駄目だけどそれ以外なら大丈夫だろ」

「うん！」

物置に七輪と一緒に置いてあった踏み台を持ってきてサラダ用のレタスを千切ってもらった。

「できた」

「それじゃ、トマトとキュウリを洗って」

「うん」

今は俺に出来る事を最大限してやるしか無いようだ。

これからは昴が居るのだし食事もきちんとしたものを食べさせてやりたい。

お袋がたまに顔を出してその度にきちんと食べなさいと、乾物や日持ちのするカボチャやジャガイモなどの野菜を置いていくので取り敢えず鍋で出汁なんかを取ってみる。

「昴。焦げてないか？」

「うん、だいじょうぶ」

昴は縁側でサンマの番をしている。

七輪には少量の炭しか入れてないので脂がたれて火がついてもサンマが焦げる様な事は無いはずだし、昂にも絶対に覗き込むなと教えてある。

「ちゃんと見ておかないとサザエさんの歌になっちゃうからな」
「うん」

「どれ。おお、良い感じに焼けてるじゃんか」
「おいしそうだね」

「絶対に美味いぞ」

晩飯はメインがサンマの塩焼きでかぼちあの煮物とサラダ。それに味噌汁とご飯になった。

「いただきます」

「ああ、ノンはちゃんと手をあわせないとダメなんだよ」

「はい、すんません。まるでお袋みたいだな」

「ひじもついちゃダメ」

「重ね重ね、すんません」

子どもの頃を思い出す。

宗一と暮らしていた昂を見る限り宗一はお袋の言いつけを忠実に守って生きてきたようだ。

それに対して俺は反抗し続けてきた。

そんな俺が昂を育てていけるのか一抹の不安が過った。

サンマの身を開いて小骨と中骨を取り除いてやると昂は器用に箸でサンマを小さな口に運んでいる。

昂は凄くしつかりしている子なんだと実感した。

昂と風呂に入り髪の毛を乾かしてやって寝かしつける。

自分の布団がよほど嬉しいのかはしゃいでいたが横になると遊び疲れたのか直ぐに小さな可愛らしい寝息をたて始めた。

昂が寝たのを確認してパソコンで春菜からもらった紙を見ながら緊急一時保育を行っている所を調べ始める。

はつきり言うとなさしいし迷ってしまう。

近くの場合は時間がきつちりしていて融通があまり聞かず。

融通が利く場所は職場から遠回りになる場所だった。

しかし、現時点で俺は残業が殆どないと言つかしなので近くの保育園にお願いする事にした。

その方が昴にも俺にも良いだろう。

あの出勤ラッシュに昴を巻き込むことを考えただけでぞつとしてしまふ。

おにぎり

「ノン、おきて。おくれちゃうよ」

「ふあい、ありがとう」

いつもより1時間早い朝だ。寝ぼけ眼を擦りながら洗面所に向い顔を洗う。

「昴？ 何してるんだ？」

「おにぎり！」

「ふえ？」

台所を覗くと昴が小さな手で形は色々で大きさも区々だけど一生懸命におにぎりを作っている。

「あのね、島のおばさんがおしえてくれたの」

「そつか、じゃ卵でも焼くか。目玉焼きと卵焼きはどっちが良い？」

「たまごやき」

昨夜の残りの味噌汁を温めなおして卵を割りほぐして卵焼きを作る。

これからはこれが日常になっていくのかななんて思ってしまう。

そんな事を考えながら朝飯を食べてスーツに着替える。

昴は既に着替えが済んでいた。

「なあ、昴。お前ちゃんと自分の布団で寝てた？」

「ねてたよ」

「おかしいな、子猫かなんかと寝ている夢を見たよ」

「ねてたもん。おくれちゃう」

急に怒りだして体を上下にゆすって早くと体で表現している。

「はいはい」

「「返事は1回！」」

急いで連絡を入れておいた保育所に向かう。

保育所に近づくにつれて子ども連れのお母さん方の姿が目につく。目の当たりにすると異世界に迷い込んだような感覚に陥る。

俺が知る筈も無い世界の雰囲気呑み込まれて途方に暮れそうになった。

「ノン、おくれちゃうよ」

「ああ、そうだな」

すると若い保育士の女の子が声を掛けて来てくれた。

「おはようございます。能登島 昴ちゃんですよ」

「あ、はい。宜しくお願いします」

「じゃ、昴ちゃん。お部屋に行こうか」

「う、うん」

昴が不安そうな顔をして俺の顔を見上げている。

「そんな顔をするな。時間には迎えに来るから。約束したろ」

「うん！ ノン、いつてらっしゃい」

「じゃな」

昴の頭をなでてやると嬉しそうに手を振って見送ってくれた。

何だか新鮮な気持ちにさせてくれる。

その反面、不安が過る。

皆と仲良くできるのか？

苛められたりしないだろうか？

泣いたりしないよな……

仕事中も昴の事が頭から離れなかった。

今日は朝一で営業ミーティングがある日だった。

「沢渡君、大丈夫かね」

「ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

「まあ、その分は営業成績でカバーしてもらえばいいから」

「はい」

直ぐに営業成績の報告書を各自が提出して部長が目を通している。

俺に対する視線は相変わらず冷ややかで営業成績ですら今回も冷ややかな結果になっているに違いない。

「野田と沢渡は何とかならないのか？ 野田は新卒とは言え半年が

過ぎようとしているんだぞ。それと沢渡。お前も相変わらずだな」
周りから失笑が漏れている。

野田は今年の大卒の新入社員で営業成績が伸び悩んでいる。
下手をすればこのまま辞めてしまいかもしれない状況なのは俺が見ても判る状態だった。

午前中はお得様回りをして会社に戻り社員食堂で昼飯を食べ、喫煙コーナーでコーヒーを飲みながら煙草を吸うのが習慣になっていた。
煙草を咥えライターを手に取ると昂の顔が浮かんできた。

昂の事を考えると俺がこんな体たらくで良い訳がない。
が、成績を上げようとすれば必然的に仕事量が増え相手先との付き合いも増える事になる。

そうなれば残業をし時間外で接待せざるおえなくなる。

子育てと仕事の両立がこんなにも大変だなんて考えた事すらなかった。

皆どうやって生活しているんだ？

「パパとは匂いが違うか……」

昂の言葉が脳裏をかすめる。

咥えた煙草を口から外し残りの煙草と一緒に捻りつぶしてゴミ箱に投げ捨てコーヒーを口にする。

「どうしたの？ 沢渡君。煙草なんて捨てちゃって」

「ああ、熊谷さん。俺、煙草を止めようかと」

「ええ！ 本気なの？ お兄さんの事でかな？」

「まあ、それもありますけど。事情があって6歳の女の子と暮らす事になったんですよ」

「ええ！ それって沢渡君が育てるって事？」

「まあ……」

熊谷さんは俺ら営業の先輩にあたる女性で、小柄な体に似合わず女なんて感じさせないくらい男に負けじと営業に駆けずり回り俺ら後輩の面倒も良く見てくれた。

でも、子どもが生まれたのを機に営業から外れ今は契約社員として営業部のサポートとして事務処理などをしてくれている。

熊谷さんが営業部を離れる時には結構な騒ぎになり。

サポートならと条件付きで契約社員として復帰してくれた。

俺も入社したての頃には良く尻を叩かれたもんだった。

「で、いきなり壁に突き当たったって顔をしているよ」

「熊谷さんには敵わないな。一緒に暮らす事になった子は昂って言うんですけど。昂の事を考えるとこのままじゃいけない気がするんだけど、営業をがんばれば残業や接待が増えてくるわけだし。そうすると昂に寂しい思いをさせる事になるしお互いに何かを我慢して犠牲にしなきゃいけないのかなんて」

「そうだね。でもそれじゃ子育てなんて出来ないと思うよ。我慢や犠牲を続けたらお互いにつぶれてしまうと思う。その為にはパートナーが必要なんじゃない？」

「パートナーですか……熊谷さんは知らない訳じゃないですよ」

「うん、知っているよ。沢渡君の成績が芳しくない理由も恋人も作るうとしない理由もね」

「じゃあ」

「だから仕事のパートナーを作りなさい」

「仕事のですか？」

「そう、居るでしょ。入社したてのあなたにそっくりな男が。あなたが変わったのは誰のおかげなの？」

「それは中田先輩が俺を」

「でしょ、中田君はもういないけどその思いや考え方は沢渡君が受け継いでいるんじゃないの？ 周りを変える事は難しい、でも自分を少しずつ変える事は出来る。そうすれば自然に周りも変わってくると思っけどな」

「少し考えてみます」

「悩んでも何も変わらないぞ。行動あるのみそれが沢渡典彰の信条じゃないの。頑張れ！ 私はいつでも君の味方だからね」

「ありがとうございます。それとこれから相談に乗ってください。子育ての事とか」

「あはは、任せなさい」

熊谷さんが腕を腰にあてて豪快に笑っている彼女には凄く安心感がある。

それは公私ともに充実しているからなのだろうか。

定時に上がろうとすると声を掛けられた。

「沢渡さん。飲みに行きませんか？」

「今日もか？ 悪いがしばらく飲みに行くのは無理だな」

「ええ、断る事を知らない沢渡さんが飲みを断るなんて」

営業なんて仕事は目に見える成績で優劣がつけられてしまう。ある意味学校と同じような場所だと思う。

そして学校と同じように成績が良いだけで人を見下す奴もいればそうでない奴もいる。

成績が冷ややかな俺にでも成績を抜きに付き合ってくれる仲間がいる。

「そう言えばお前の所って2人目が産まれるんじゃないのか？」

「ええ、もう直ですよ。だから母ちゃんに尻を叩かれまくりですよ。成績を上げるって、生命保険やらなんやら結構大変すから」

「生命保険か」

「それに学資保険もね」

「それって進学の時とかにつて奴か？ まだ小さいのに」

「あのね、沢渡さん。小さい時からじゃなきゃ意味がないんですよ」

「大変だな、パパになるのも」

「でもね、子どもの笑った顔を見るとそんな事なんて一発で吹き飛ばしますよ」

「そっか、悪いが先に帰るぞ」

「お疲れ様です。飲むときは声を掛けてくださいよ」

「おう」

嬉しそうに目を細めて子どもの話を話す同僚の笑顔が頭に残った。
そんなあいつからは我慢や犠牲なんて全くと言って良いほど関係ない言葉に思えた。

保育園に昴を迎えに行くとき直ぐに昴が飛び出してきた。

「大人しそうだから少し心配していたけど良い子でしたよ。でも、お父さんと一緒にいる時の笑顔が一番だね」

「昴、帰ろうか」

「うん！」

若い女の保育士さんの言葉が何だかむず痒かった。

熱

翌日、思い切って水野課長に声を掛けた。

「課長、野田を俺に預からせてください」

「おいおい、どう云う風の吹き回しだ」

「実は……」

昴の事もこの際だから全て話しておいた方が良いと判断した。

会社には昴を扶養家族として既に届を提出してある。

遅かれ早かれ聞かれるはずで早いうちに聞いておいてもらった方が何かと都合が良いし、水野課長は俺が一番信頼している上司だし今まで俺の事を庇い続けてくれた人の1人だ。

「そうか、そんな事が」

「はい」

「本気なんだな」

「中途半端な気持ちであいつを育てようなんて思っていません」

「そうか、部長には俺から事情を説明しておくよ」

「ありがとうございます」

「でも、これだけは言っておく。今まで沢渡がしてきた事に対して営業部内に反感を持っている奴も少なくない。直ぐに協力なんてしてくれないだろう。それだけは肝に銘じておいてくれ」

「判りました」

俺は野田を連れて営業に回った。

朝のミーティングで営業部内に俺が野田と組むことが全員に伝えられた。

課長の言葉通り良い感情を持っている奴は殆ど居ないようだ。

それも当然の事と言えばそうに違いない。

窓際の俺と新人の野田は営業成績ではワーストワンかツーを行き来していたのだから、そんな2人が組んで今更どうするくらいにしか

思えないのは仕方がないのか。

そんな営業部の中でも課長だけはこんな2人にも期待をしている様だった。

野田に聞かれた質問には答えるけど何かを教える様な事はしない。中田先輩も同じように俺を営業に連れ回し、先輩の全てを曝け出してくれた。

そこから何を学ぶかは本人次第だ。

野田の事も分け隔てなくバックアップしていた熊谷さんの言葉が俺を後押しする。

そしてそろそろ昴の保育所を決めなきゃいけない日が近づいてきた。何故だか昴が朝から俺にべったりと纏わりついていた。

「昴、早く支度しろよ」

「うん」

「どうしたんだ？ 何処か具合でも悪いのか？」

俺の問いに昴は首を横に振った。何処となく昴の瞳が潤んでいて顔が少し赤くなっているのを朝の忙しさで見落としてしまった。

午後からの営業回りの予定を野田に説明している時に携帯が鳴った。

「沢渡先輩、どうしたんですか？」

「保育所からだ」

「へえ？ 保育所？ 先輩って子持ちだったんですか？ たしか独身じゃ」

そんな野田の言葉が吹き飛んだ。

昴が熱を出したらしい。

子どもの平熱は基本高いほうで午後になると更に高くなるので少し様子を見ると伝えられ、更に熱が上がれば直ぐに連絡するとの事だった。

心配で仕方なく仕事に身が入らない、営業にとってそれは一番いけない事なのだが流し仕事しか出来ていないのを自分自身が一番感じた。

野田には申し訳ないが事情を説明している余裕なんて今の俺には何処にも無かった。

定時に帰社して翌日の予定は連絡するからと報告書を野田に丸投げして保育所に向かった。

「遅くなりました。昴は」

「ああ、昴ちゃんのお父さん。少し熱が下がったみたいなので連絡はしませんでしたけれど一応病院にお願いしますね」

「判りました。昴、帰ろうな」

「うん」

昴が力なく俺の脚にしがみ付いた。

「子どもは体調を崩すと普段甘えない子でも甘える事がありますので見逃さないで上げてくださいね」

「すいませんでした」

「昴ちゃん、またね」

「うん、バイバイ」

病院に昴を連れていくと軽い風邪だろうと医者に言われ薬を受け取って家に戻ってきた。

消化に良い物と思ってウドンと昴が好きな魚をと思いカレイの煮つけを作ったけれど箸が進まないようだった。

「ゴメンね、このへんがへんで…… ゲホ」

いきなり昴が喉の辺りを触り食べた物を吐き出してしまった。

慌てて汗を拭いていたタオルで受け止め慌てて風呂場から洗面器を持ってきた。

「ノン……」

「気にしなくても大丈夫だよ。薬、飲めるかな？」

「のみたくない」

「でも、少し飲んだら楽になるからね」

「うん」

医者が出してくれた飲み薬を飲ませるが直ぐに戻してしまう。

どうしていいものか困り果ててお袋に電話すると何でもつと早く連絡しないのかと激怒されてしまった。

それでも子どもの頃の俺たちにしていた事を教えてくれた。

「薬はジュースに混ぜたらあんた達は飲んでくれたわよ。それと温かくして寝かせなさい」

「判ったよ」

やっとの事で薬を飲ませ昴を寝かしつける。

顔は赤くなり息苦しそうに呼吸をしている。

冷やしたタオルで顔を拭いてやるくらいしか出来ない自分が情けなかった。

久しぶりの本格的な営業回りを始めたばかりで俺自身も疲れていた様で、気づかない間に昴の横で寝てしまったようだ。

どれだけ時間が過ぎたのだろう。

まるでストーブや焼けた炭を抱いているような感じがして目が覚めた。

目の前の昴がとても苦しそうにしている呼吸は浅くそして早い。

体を触ると信じられないくらいに熱くなっていてぐったりとして力が無い。

掛け布団で昴の体を包み込み、気付くと家を飛び出していた。

携帯でタクシーでも呼べば数分で来てくれるだろうが気が動転してパニックになり、大通りに向かって走っていた。

大通りまであと少しと言う所で前方の暗がりですの罵声と女の叫ぶ声が聞こえてきた。

「金だよ、金をよこせ」

「駄目よ、これは大事なお金だから」

「うるせ！ 旦那が渡せと言っているんだ。サッサと渡しやがれ！」

犬も食わない夫婦喧嘩なんかに係わりあっている暇はない。

昴を病院に連れて行くのが最優先だ。

通り過ぎようとした瞬間に男が拳を振り上げた。

女の体が俺の方に倒れる様に崩れ、思わず女の体に手を回して支えてしまった。

すると殴った男が俺の顔を見て顔を引き攣らせている。

「な、なんだ貴様。ただの夫婦喧嘩だよ」

そう言つて後ずさりをしてしながら路地に走りだして姿が見えなくなつてしまった。

俺が支えている女の格好は流石にここ数日の晩は冷えると言つのに薄手の紺色のワンピース姿だった。

泣きつ面に蜂とも言ふべきか右手には苦しそうな昂が、そして左手には気を失っている見ず知らずの女が……

途方に暮れそうになると大通りから空車のランプをつけたタクシーが俺たちのいる路地に入ってきた。

大通りで客をおろしＵターンしようとしていたのかもしれないが女を引き摺るようにしてタクシーに縋り付いた。

「どちらまで」

運転手が怪訝そうな顔でミラー越しに俺を伺いながら声を掛けてきた。

当然と言えば至極当然の事だろう。

夜遅くに意識の無い女と布団に包まれた子どもを抱いてタクシーに乗ろうとしている人間なんて世界広しと言え映画の世界じゃあるまいしあり得ないのだから。

行先を告げようとした時に女が気づいた様だった。

女の顔を覗き込み俺は息をのみ胸の奥が締め付けられるような感覚になるが、直ぐに腕の中の熱が俺を現実に戻してくれた。

「あの、大丈夫ですか？」

「あなたは誰？ 私を何処に連れて行く気なの？」

「勘違いするな、俺はただ」

女と目が合つと狭い車内で女が後ずさりをして逃げ出そうと慌てた。

すると運転手が強張った顔で無線機を手にした。

ここで警察なんか連絡されたらとんでもない事になってしまう。そんな状況で俺が大声を上げれば収拾が付かなくなるのが目に見えた。

「頼むから病院に行ってくれ。その後なら警察なり何処にでも行く。頼む」

「病院？」

懇願するしかなかった。

俺の言葉に女が直ぐに反応して俺の腕の中で苦しそうにしている昴に気付き昴の首筋に手を当てた。

「凄い熱じゃないの、直ぐに病院に。運転手さん早く」

病院に着くと女が俺の腕を掴んで病院の緊急窓口に行き子どもの急患だと告げる。

診察室に入れられ状態と経過を説明させられた。

軽い脱水症状があり直ぐに点滴が投与され、体を冷やすために腋の下や首筋にタオルで包まれた氷嚢が当てられている。

何もかも初めての事で戸惑いどうして良いのか判らず落ち着いている事なんて出来ない。

しばらくすると昴がうつすらと目を開けた。

「昴、大丈夫か？」

俺の声が聞こえた為ではなく投与されている薬が効いてきているのだろう。

力なく再び目を閉じてしまった。

呼吸はいくらか楽になったのか小さな寝息が聞こえる。

それだけで全身が脱力してしまう。

「ちよつと、来なさい」

「な、何を」

女が俺の腕を掴み昴が寝ている処置室からひんやりとした廊下に引っ張り出されてしまった。

「あなたがあの子の親なんですよ」

「まあ、一応」

「一応ってあなたね！」

「それぞれの家には事情つてもんがあるんですよ。あなたが旦那に殴られたように」

頭に血が上っていたのに彼女の顔を見てクールダウンして一気にマインスの世界まで落ちてしまった。

「すみません、言い過ぎました。それこそ事情って奴ですよね」

哀しそうな彼女の顔が少し落ち着きを取り戻している。

「私こそごめんなさい。でも伝えておきたい事があって。子どもに何かあった時は大人が狼狽えちゃいけないんです。落ち着いて大丈夫だからって言うてあげないと」

「無理す。あんな昴を見たのは初めてで」

「大丈夫、出来ます。子どもは本能的に誰が助けてくれるか判るんです。これは弱い子どもが生き抜くために持っている力だと思えます。昴ちゃんでしたっけ、昴ちゃんはあなたに助けを求めているんです。そんなあなたが狼狽えていたら昴ちゃんは不安になるばかりじゃないですか。違いますか」

「はい」

「私もあなたの家庭の事も事情はよく知りません。でもあなたが昴ちゃんを病院に連れてきたと言う事はそう言う事なのでしょう。だったら尚更です、昴ちゃんにはあなたが付いていてあげれば大丈夫なんです」

「ありがとう御座います」

「それともう一つ。熱が体にこもって何も受け付けない時はスポーツドリンクを凍らせて小さく砕いて食べさせてあげると良いですよ。ただし体が驚いてしまうので少しずつね」

彼女が言う所の俺が昴を病院にと言うのは恐らく母親がいらないと言う事をさすのだろう。

しかし、見れば見るほど彼女は彼女に似ていた。

すると看護師さんが彼女に声を掛けた。

「さあ、次はあなたの順番よ」

「え、私は別にどこも悪くないです」

「その顔の傷はどうしたのかしら？」

「これは、その」

彼女が思わず口ごもってしまった。

看護師や医者に『不注意でぶつけた』と言い訳しても直ぐに見破られてしまう事を知っているのだろう。

すると看護師の矛先が俺に向いた。

「まさか、つて事は無いわよね」

看護師の冷たい視線が俺に突き刺さる。

思わずホルドアップして首を横に振るしか出来なかった。

「彼はただの行きずりの人よ。旦那に殴られたところを助けてくれたの。この際だから診てもらって診断書でも証拠にもらつとくわ」

彼女が静かにそう言いながら看護師さんと診察室に入っていく後姿を見送った。

家に帰って来る頃には日付が変わっていた。

教わった通りにスポーツドリンクを製氷皿に半分くらい流し込んで凍らせる。

「ノン」

「台所だよ」

昴が弱弱しい声で俺を呼ぶ声が聞こえて部屋に行くと薬が効いて少し眠れたのか顔の赤みも少し冷めている様だった。

布団の横に腰を下ろすと昴が小さな両手を広げて俺の顔を伺っている。

横になると昴が抱き着いてきた。

「ノンがつめたくてきもちいい」

「うわあ、俺つてこのまま……」

今更ながらスエットにＴシャツ姿で夜中に駆けずり回っていた事に

気付いて凹んでしまう。

そりゃ、タクシーの運転手があんな顔をする訳が理解できる。

昴の体は心なしが熱が取れて温かく感じる。

それでも波の様に何度となく熱が上がり水分を補給した為か汗をかいてその度に洋服を着替えさせ凍らせたスポーツドリンクを与える。そんな事を一晩中繰り返した。

熱を出しただけで小さな子どもの体力はあっという間に消耗してしまふ。

そんな昴を見るたびにどうして俺じゃないんだと辛くなる。

翌日になると口数も増え食欲も出て来たようだ。

心配性のお袋に連絡を入れると食欲が出てきたら安心だけど油断は禁物だと釘を刺された。

おかゆや消化に良い物を食べさせ薬を飲ませて昴と共に横になる。

すると昴が俺の左目の上にある傷跡を触ってきた。

「いたい？」

「もう治ったから痛くないよ。それにこれは昴の所為じゃないだろ」

「でも」

「でももへつたくれもないの。この傷は誰も悪くないの。いいね」

昴と兄貴を連れ帰った日にグラスで出来た傷は思ったより早く抜糸が出来て、その後は消毒すら必要ないからと言われた。

新しい傷の所為か時々痒くなる時がある、当然の事だけど痛むことは無かった。

会社にはもう一日休む事を告げて野田には何かあればいつでも連絡する様に伝えてある。

まだ覚束ないが大丈夫だと思う、これから俺も野田も正念場だと思いいなす。

流石に寝不足が続き、いつの間にか寝入ってしまったようだ。

昴の声が遠くから聞こえる。

「ノン、あさだよ。おくれちゃうよ」

「ふえい？ 昂、大丈夫なのか？」

「うん」

「どれどれ」

昂のおでこを触り首筋に手を入れて体温を感じようとすると昂が怒り出した。

「もう、そんなにさわらないで。お腹がすいたの！」

「ごめんな」

「ノン、はやくごはん」

「はいは一回だな」

「うん」

こんな小さくても女の子は女の子なんだと実感する。

ベタベタと男の俺に触られるのが恥ずかしかったのだろう。

「ノンのかお。きたない」

「き、汚い？」

「うん、おひげがはえてる」

手で顎を触ると無精髭が伸びている。

昂に汚いと言われ衝撃を受けながら洗面所に行くと鏡の中に濃いおっさんの顔があった。

「ノン、朝ごはん」

「はいはい」

「もう、はいは一回でいいの」

ふおつとけーき

一時緊急保育の期限内に何とか保育園が見つかり昴と実家に向かっていた。

「ノン、パンケーキが食べたい」

「パンケーキ？」

「うん、みっちゃんがおやつに食べておいしかったって」

「みっちゃんって保育園の？」

「うん」

みっちゃんは保育園で仲良くなった女の子らしく昴との会話の中で時々名前が出てきた。

「パンケーキってホットケーキの事だぞ」

「ふおつとけーき？」

「そつ」

確かホットケーキを綺麗に焼くにはフライパンを温めてから濡れ布巾に置いて一度温度を下げて焼くのがコツだったはずだ。

ホットプレートがあれば楽なのだが家にそんな物は存在しなかった。実家が兄貴の家にならあるのを憶えている。

お袋がたまには帰って来いとうるさいく言つのを思い出し実家に向かう事にした。

島育ちの昴は電車が珍しいのか電車に乗るのを楽しみにしている節がある。

兄貴と昴を島から連れて帰ってきた時も確かそうだった。今も俺の隣で窓の外を流れる景色を楽しそうに見ている。

「なあ、昴。保育園用のお弁当箱とかを買わないといけないのだけどの熊のキャラクターで良いのか？」

「くまじゃないもん、ねこだもん」

「ええ、その昴が持っているぬいぐるみって猫なの？ どう見ても

目つきの悪い熊にしか見えないぞ」

「ねこのマノンだもん」

「ま、マノン？」

「うん、くろねこのマノン」

「じゃあ、俺は？」

「ノン」

「そいつは？」

「マノン」

「それって可愛いのか微妙だな」

「かわいいの。ほら」

昴がマノンを俺の顔の前に突き出すのではなく顔の横に見比べる様に突き出した。

子どもって純粹で残酷な生き物だ。

俺と目つきの悪い熊ぬこのぬいぐるみとを一緒にしないでくれ。

そしてある共通点に気が付いた。

昴が大好きなぬいぐるみは目つきの悪い猫のマノン。

昴が可愛がっていた目つきの悪い犬がサン。

昴が懐いたのが目つきの悪い俺、ノン？

本気で凹む……

「ただいま。昴を連れて来たぞ」

「電話くらいすれば車で迎えに行ったのに。昴ちゃん、いらっしやい」

実家の玄関をくぐるとお袋が出迎えてくれた。

するとそれまではしゃぎ回っていた昴が俺の後ろに隠れてズボンを掴んでいる。

「このくらいの距離なんて島育ちの昴ならなんて事は無いよ。ほら、

昴。俺の母ちゃんだ挨拶くらいしろ」

「こんにちは」

昴の声は蚊の鳴く様な声だった。

「あらあら、緊張してるのかしら？」

「お袋、親父は？」

「ボウリングに行ったわよ」

「ボウリングって玉を転がしてピンを倒すあれ？」

「そうよ、最近はサークルに入って暇さえあればボウリング場通いよ」

親父の奴、逃げやがった。

昔から面倒事が嫌いな親父は事ある毎にお袋に問題を丸投げして行方を晦ます悪癖があった。

「さあさあ、上がった。お菓子も買つてあるのよ」

「昴、ほれ」

「う、うん」

居間に行くとお袋が俺にはお茶を昴にはオレンジジュースとお菓子をを出してくれた。

昴は俺の服を掴んだまま俯いている、そんな昴を見てお袋が声を掛けてくれる。

「どうしたのかな？ お菓子は嫌い？」

お袋の問いにも昴は小さく首を振るだけだった。

そんな状況を打破するかのように玄関から春菜の声が聞こえてきた。

「おばさん、昴ちゃん達来てる？ ああ、昴ちゃんの靴を発見！」

ドタドタと板張りの廊下を走る音がして襖が勢いよく開いた。

「昴ちゃん、おひさー」

「あのな、春菜。俺に挨拶は？ それと何で昴達なんだよ」

「もう、細かい事を気にすると大物になれないよ」

「あのな、お前こそそんなに大雑把だとタフガイに嫌われるぞ」

「大丈夫だよ。彼は私にぞっこんだから彼女すら出来ない典兄になんて言われたくないよ」だ。昴ちゃん、お庭で遊ぼうか」

「うん」

春菜が昴に手を差し出すと嬉しそうに昴が春菜の手を握って2人で庭に飛び出して行った。

「ノリ、昴ちゃんは普段からあんな感じなの？」

「いや、島育ちで色々な人の中で育っているから物怖じしない方だと思う。ここに来るまでは俺の家族に会えるのを楽しみにしていたみたいけど、いざ来てみたらあんな事があつた時に居た人が居た訳だ。春菜もあの場に居はしたけど後で一緒に買い物したりしたかな。これで美紀さんでも居たらもつと怖がるかもしれないけどな」

「美紀さんも可奈ちゃんと後から来るわよ。昴ちゃんが来ることを話したら可奈ちゃんが昴ちゃんに会いたがつて」

胃の辺りがキュンと締め上げられる。

親父がケツを捲る筈だ。

可奈は春菜と一緒に昴と買い物に行つて楽しかったのでまた遊びたかつたのだろう。

「時期尚早なんじゃないのか」

「遅かれ早かれの問題でしょ。絡まつた糸は早い時期に解いてしまつた方がよいのよ。無駄に時間が経つと解けるものも解けなくなつてしまう時があるの」

「時間だけが解決する事だつてあるだろう」

「一応、四十九日も終わつたんだし良い時期だと思うの」

「そうだな、兄貴が見初めた美紀さんだもんな。だけど」

「お母さんだつて判っているわよ。昴ちゃんの事を一番にでしょ」

兄貴を連れ帰つてしばらくして葬儀が執り行われた。

それは美紀さんの達での願いで、離ればなれで暮らしていたのだから最後の時は家族だけでと内々で執り行われた。

俺自身も参列すべきだったが昴が混乱しないように何事も無かつたかのように過ごした。

兄貴なら絶対に判つてくれると信じているから。

そして四十九日の法要で分骨され本骨は美紀さんの元に、兄貴が焦がれた星が降る小笠原に分骨は埋骨される事になり天文台の同僚に託された。

今日、美紀さんと可奈が実家に来るのは可奈が昴に会いたがつてい

ただけじゃないのが俺には判った。

それは俺自身が美紀さんに頼んでいた事があるからだろう。

「昂、買い物に行くぞ」

「え？」

「ホットケーキの材料を買いに行こう」

「うん！」

「典兄、私も」

昂と春菜の3人で実家の近くにあるスーパーに歩いて向かう。

昂は見慣れない場所だからなのか春菜と手をつないでキョロキョロしながら歩いている。

「ノン、あそこの山みたいなのは、なに？」

「あれは土手だよ。あの向こうに大きな河が流れてるんだ」

実家の側には大きな河が流れていて土手の向こうの河川敷は公園や野球場になっている。

小笠原にも川はあるが大きな河は無く河口から1キロも遡上すると川幅も2〜3メートルになりそれ以上カヌーですら遡上できなくなってしまう。

昂とバイクで島を回った時に見たところ所々手が加えられ護岸で整備されていたけれど木々が水際まで生い茂りまるでアマゾンの源流の様な様相だったのを憶えている。

「行ってみるか？」

「いけない、はやくおかいものしよう」

昂なりに気を使っている気がしてならない、子どもは素直で無邪気な物だと勝手に思い込んでいたようだ。

春菜と顔を見合わせると春菜自身も気が付いているようだ。

「よし、河原まで競争だ」

「典兄なんかに負けないから。よいい、ドン！」

ライニング気味に春菜が駆け出す。

キョトンとした昂を抱き上げ肩車をして後を追いかける。

「ちゃんと掴まってる」

「うん！」

春菜の背中がどんどん近づいてくる。

「ノン、もつとはやく！」

「よし！」

更に加速して土手の階段を2段抜かしで一気に駆け上がると広い河川敷とゆつくりと流れる河が見渡せ、心地良い風が吹き抜けている。

「うわぁ、おおきな川だね」

「気持ち良いな」

春菜が息を切らして土手を上ってきた。

「やっぱり典兄には敵わないや」

「まだまだ、負ける気がしないよ」

「そんなつよがりを言って、本当は息も切れ切れの癖に」

「まあな」

「昂ちゃん、下に行ってみよう」

「うん」

土手の斜面に体を投げ出すと抜ける様な秋空に雲がゆつくりと流れている。

冷たくなってきた風が頬をすり抜け気持ちが良い。

昂は春菜と土手の下でしゃがみ込んで何かを探している様だった。

しばらく風に吹かれていると昂の嬉しそうな声が聞こえてきた。

「あつた！ はるなお姉ちゃんあつたよ」

「本当だ、凄いね」

「えへへ、それもふたつ。おおきいのとちいさいやつ」

ゆつくりと土手を下りてしゃがんでいる春菜と昂を覗き込む。

「へえ、シロツメクサか」

「えっ、ノン。クローバーだよ」

「クローバーはシロツメクサの別名なの」

「わかんない」

「で、何を見つけたんだ？」

「えへへ、よつばのクローバー」

昂が満面の笑顔で両手に大きな四葉のクローバーと小さな四葉のクローバーを俺の目の前に差し出した。

「はるなお姉ちゃんがおしえてくれたんだよ。しあわせになれるんだって」

「そっか」

「もう、典兄は素っ気ないんだから」

「買い物に行くぞ。可奈たちが来るって言ってからな」

「えっ、可奈ちゃんが来るの」

「そうだ、だから早く買い物をしてホットケーキを作ろう」

「うん！」

「典兄、それじゃ美紀さんも」

「大丈夫だよ」

春菜が心配そうに俺の顔を見る。

確信はないが俺は兄貴と同じように美紀さんの事を信じている。

あの時は仕方がなかったんだ、そう言い聞かせて。

クローバー

買い物を済ませて実家に戻ると玄関にパンプスと小さな靴が綺麗に並べられていた。

「どうやら美紀さんと可奈が来ているようだ。」

玄関の引き戸を閉めると可奈が嬉しそうに居間から飛び出してきた。

「昂ちゃん！」

「ああ、可奈ちゃんだあ」

昂と可奈が両手をつないで嬉しそうに飛び跳ねている。

まるで双子の姉妹のようだ。

双子ではないが異母姉妹には違いなかった。

そこに美紀さんが申し訳なさそうに顔を出すと美紀さんの顔を見た瞬間に昂の動きが止まった。

すると美紀さんから血の気が引いていくのが見て取れた。

春菜がこの場に居れば何とか助け船を出してくれるかもしれないが、昂が見つけた四葉のクローバーを持って自分の家に戻ってしまっている。

「可奈、昂と台所にこの荷物を持って行ってくれないか」

「うん、昂ちゃん行こう」

「うん」

可奈に言われて昂がスーパーの手提げ袋の片方を持って2人で走り出した。

「卵が入ってるからな」

「「はい」」

2人の姿が見えなくなると美紀さんが深々と頭を下げた。

俺に怪我を負わせてしまった事を気に病んでいるのだろう。

「典彰君、本当にごめんなさい」

「あんな物、高校の時の俺にすればただのかすり傷だよ。気にすん

な」

「でも」

「でももへつたくれもねえの。義姉さんがそんなんじゃ、可奈も昂も気にするだろうが」

「まだ、義姉さんって呼んでくれるんだ」

「たりめえだろ、ばーか」

高校時代からの付き合いで兄貴と美紀さんの3人であの頃は良く遊びに出かけた。

俺が道を外れそうになると必ず美紀さんは叱ってくれて本当の姉の様な存在だった。

それでも俺は兄貴とは正反対の道に落ちていった。

親であるお袋と親父ですら手を焼いていたのに、そんな俺を美紀さんは見捨てないでいてくれた。

無意識に美紀さんの頭に手を置いて髪の毛をくしゃつとしていた。

すると、美紀さんの瞳から涙がこぼれた。

「泣くな。可奈が居るんだぞ」

「うん、ありがとう。典彰君は優しいね」

「そんなんじゃねえよ」

「昔から優しい子だったよ。宗一さんは包み込んでくれる優しさで、典彰君はしっかり繋ぎとめてくれる優しさ。だから昴ちゃんも典彰君をあんなに信頼しているんだね」

「で、どうするんだ？」

「ちゃんと可奈には話す。2人が異母姉妹だって」

「そうか判った。俺もそれに従うよ」

「ありがとう」

「ノリ！」

「ノン！ 早く！」

「今、行くよ」

居間ではお袋がホットプレートを準備していてくれた。

美紀さんと一緒に居間に行くと微妙な空気が流れた。
するとお袋が動き出した。

「そつだ。昴ちゃんと可奈ちゃんに良い物をあげる」

「ええ、なあに？ お婆ちゃん」

可奈は直ぐに反応するが昴は可奈の後ろで様子を伺っている。

そんな事を気にせずにお袋は2人に小さなエプロンをつけた。

昴のエプロンは薄い黄色で黒猫のアプリケが付いていて名前が刺繍されている。

可奈の方はピンク色で可奈の好きなティベアのアプリケが付いて名前が同じように刺繍されていた。

「これっておばちゃんが作ったの？」

「そつよ、可愛いでしょ」

「うん、ありがとう」

「嬉しいわ、昴ちゃんが喜んでくれて」

昴が照れているのを見てお袋は目を細めて喜んでいる。

俺にはどう見ても黒猫とティベアの違いが良く判らない、するとお袋に睨まれてしまった。

台所に向かうとエプロン姿の昴と可奈がまめまめしくお手伝いをしてくれる。

そんな所に逃げ出していた親父がボウリングから帰ってきた。

可奈がいち早く気づき玄関に向かって走り出した。

「みてみて、お爺ちゃんにもらっちゃった」

「つて、親父。まだ2人には早くないか？」

可奈が持っているのはカラフルな箱に入った子ども用の包丁だった。親父を睨むと親父はバツが悪そうに頭を掻いている。

「そ、そつかなあ。2人ともお手伝いが好きだって聞いたから」

「ありがとう御座います。お義父さん」

「美紀さん、そんなに気を使わないでおくれ家族なんだから」

「はい」

今の俺達に出来る事は自然にふるまう事だけだ。

「テレビでも小さな子が料理をしているんだから昴ちゃんも可奈ちゃんもやってみたいよね」

「うん！」

お袋の一言で居間のテーブルに小さなまな板を置いて昴と可奈の料理教室が始まっている。

2人は恐る恐る半分に切られたリンゴを切ろうとしている。

俺と親父はハラハラしながら見ているがベテラン主婦のお袋と美紀さんがついていれば安心だろう。

2人の嬉しそうな声がぎこちなかった空気を解していく。

ホットケーキを焼きはじめると春菜が再びやってきた。

「うわぁ、典兄のホットケーキなんて久しぶり」

「あのな、誰が作ってもミックス粉で作るんだから同じだろう」

「それが全然違うんだな典兄が作ってくれたホットケーキは世界一美味しいんだよ。そうだ昴ちゃん、これ。可奈ちゃんにはこっちな」
春菜が昴と可奈に渡したのは本に挟む栞だった。

昴の栞には昴が見つけた大小の四葉のクローバーと黒猫のマノンやきらきら光るハートや星がラミネートされ穴があけられシンプルなリボンが付いている。

可奈の方にはデイベアと董が何かの押し花がラミネートされ同じようにきらきらと光っている。

「ありがとう、はるなお姉ちゃん。たいせつにするね」

「ママ、みてみて」

「綺麗だね、春菜ちゃんありがとう」

昴は大切そうに栞を胸に抱きしめ、可奈は嬉しそうに美紀さんに見せている。

お袋も親父もそして春菜も昴や可奈の事を気にかけてくれているのがとても嬉しく感じた。

高々ホットケーキを昴が食べたいと言っただけで大騒ぎになっている。

ホットプレートで俺が小ぶりのホットケーキを焼き上げると端から春菜・可奈・昴の3人が持つて行き、定番のメイプルシロップやバターにチョコレートソースをかけて口に運んでいく。

そして用意した生クリームや缶詰のフルーツを使って楽しそうにデコレーションしている。

「ノン、リングはどうするの？」

「そのままでも良いけどこうしてホットプレートで焼くんだよ」

昴と可奈が切つて芯を取り除いたリングをホットプレートで焼くとしんなりして焼きリングになっていく。

砂糖を加えなくても旬のリングは酸味と甘みが良い感じで生クリームやメイプルシロップとの組み合わせも抜群だった。

「でも、典兄つて何処でこんな事を知っているの？」

「あのね、春菜ちゃん。実は宗一さんの代わりに時々可奈に焼いて食べさせてくれてたの。でね」

「ああ、義姉さんは余計な事を言うなよ」

「良いじゃない。可奈の喜ぶ顔が見たかったんでしょ」

「まあ、放蕩兄貴があんなだからな。時々俺が兄貴の代わりに遊んでやらないとな。俺なりに考えて必死だったんだよ」

「そうだったんだ。でも宗兄も典兄に『放蕩』なんて言われたくないと思うけどな」

「あのな」

居間から笑い声が絶えない。

そんな雰囲気の中、昴からはすっかり固さが取れ美紀さんとの距離も少しだけ近づいた様に感じていた。

「疲れた」

「はい、お疲れ様」

お袋が缶ビールを持ってきてくれて、つまみを作り台所に戻って行った。

昴は可奈ちゃんと一緒に美紀さんが寝かしつけてくれている。

可奈が昴とお風呂に入りたがったが流石にそこまで昴は美紀さんに心を開いてなくて、いつもの様に俺が風呂に入れて髪の毛を乾かしてやった。

今は春菜が泊まる気満々で風呂に入っている。

久しぶりに俺が実家に帰ってきたのでゆっくり秋の夜長に募る話でもしたいのだろう。

すると親父が口を開いた。

「典彰、お前。最近営業回りしているらしいじゃないか」

「まあ、思う所があつてな」

「大丈夫なのか？ 母さんが心配してたぞ。昔のお前は夜遅くまで接待や挨拶回りをしていたじゃないか」

「一応、ちゃんと考えているよ。後輩をつけてもらって仕事を教えている途中だよ。だから後輩に接待なんかは任せてあるし何かあれば俺がケツを拭くよ」

「そうかお前は偉いな」

「普通だろ」

そこに春菜が風呂から出てきた。

「やっぱり、ここのお風呂は広くて気持ちが良いや」

「古いだけだよ」

「もう、うちのシステムバスなんかと比べて風情があつて良いじゃん」

「古いタイル張りの風呂なんて掃除が大変なんだぞ」

「そつか、典兄の家もシステムバスじゃないんだっけ。そう言えば煙草吸わないね」

「止めたんだ、煙草」

春菜と親父は俺の言葉を聞いて瞬間冷凍されたマグロの様になり、お袋が炙ったスルメを驚いて床に落としそうになった。

「そんなに驚く事じゃないだろ」

「驚くわよ。ノリ、あんた熱でもあるんじゃないの？」

「あるか！ 俺は至って健康だ」

「大きな声を出さないの。昴ちゃんと可奈ちゃんが起きちゃうでしよ」

「お袋が変な事を言うからだ」

「本当に驚きばなしよ。昴ちゃんと暮らすなんて言い出すし。仕事も再始動したんでしょに。その上にあれほど止められなかった煙草を止めたなんて信じられる訳ないじゃい」

「俺、昴と暮らし始めて今のままじゃ駄目だって思ったんだ。俺自身がちやんとしていないといけないんだって。だって俺が駄目駄目なら昴が笑われるだろ、そんな事は俺自身が許せない。まあ、朝は昴に起こされるしまだまだけどな」

「あきれた。相変わらず手の掛る子なのね」

「でも、昴の事なら俺は何でもできるし腹をくくれると思うんだ。だから昴が俺と居るのが嫌だと言うまで離れる気はないし離れるつもりはない」

「大丈夫よ。昴ちゃんが典彰君を嫌う訳ないじゃない。あんなに信頼しているのに」

「義姉さん。2人は？」

「手をつないで寝たわよ」

昴と可奈を寝かしつけた美紀さんが居間に顔を出した。

静かな時間が流れる。

庭で鳴いている秋の虫の声だけが聞こえる。

俺が缶ビールを煽るとお袋が静かに話し始めた。

「どうするの？ 可奈ちゃんと昴ちゃんの事」

「義姉さんは覚悟が出来ているんだろ。なら本当の事を話すだけだよ」

「ノリ、大丈夫なの？ 2人はまだ6歳なのよ」

「だから余計だろ。大きくなって関係が拗れれば修復は難しくなる。そう言ったのはお袋だぞ。幸いと言つべきか可奈と昴は打ち解けて仲が良い。アルバムなんかを見れば何れお互いの関係に気付く。そ

の時じゃ遅いんだよ。俺が明日、2人に話すけど良いかな？ 皆の了承が欲しいんだ」

「典彰の思う様にして見なさい。僕は家族なんだから」

親父の言葉に美紀さんもお袋も頷いた。

春菜に至っては涙を零していた。

「春菜は相変わらず泣き虫春菜だな」

「馬鹿っ」

俺は美紀さんに頼んでおいたことを聞いてみた。

「義姉さん、例の方はどうだった？」

「何も見つからなかったわ」

「そうか」

「ノリ、あんた何を美紀さんに頼んだの？」

「ああ、昴の母親の手掛かりが兄貴の荷物の中にないか探してみてくれて頼んだんだ。やっぱり見つからなかったか」

兄貴の遺品とも言うべき荷物はいったん俺の家に届いたが俺が開けて良いものではなく、そのまま美紀さんの元に送り届けた。

荷物自体は俺自身が梱包したのだから何が入っていたのか知っている訳だけど全てを調べた訳ではなくそんな時間も無かった。

その為に改めて美紀さんには酷かもしれないが美紀さん以外に頼める人はいないのが現状だった。

「本なんかも全部見てみたけど何も、でも宗一さんの使っていたノートパソコンだけは宗一さんが勝手に触られるのを嫌っていたから怖くて触ってないの」

「で、そのパソコンは？」

「ここに持ってきてみたわ。典彰君が調べてもらえないかしら。それと昴ちゃんのアルバムも、これは流石に持っているのが辛いから」
「判った、預かってパソコンは中を見てみるよ。アルバム、ありがとう」

もしかしたらと言う気持ちも多少あったが昴のアルバムは処分される事は無かったようだ。

翌朝、春菜は一旦自宅に戻り直ぐに俺の実家に顔を出した。

すると可奈と昴が春菜を誘って土手に行って四葉のクローバーを探すと言いだした。

昴を俺が、そして可奈を美紀さんが居間に連れて行くと居間には親父とお袋が神妙な顔をして気まずそうに座っている。

春菜がケツの座りが悪いのか立ち上がろうとしたのを俺が止めた。可奈と昴は場の空気を感じとり不安そうな顔をしている。

そんな2人の前にしやがみ込んで2人の頭に手を置きゆつくりと2人に判る言葉で話し始めた。

「昴と可奈に大事な話があるんだ」

「今は全部判らなくても良いから俺の言う事をきちんと聞いて欲しい。良いかな」

「うん」

昴と可奈が小さく頷いてくれた。

一息ついて昴と可奈を真っ直ぐに見て2人に同時に同じ事を聞いた。

「2人のお父さんの名前を教えて欲しい」

「「の」とじま　そういち」

「えっ?」「あれ?」

昴と可奈が驚いて顔を見合わせている。

「お父さんの顔ってどんな顔だった?」

2人が同時に俺の顔を指さし再び顔を見合わせた。

「あのね、実は昴と可奈は本当の姉妹なんだ。父親は俺の兄さんの能登島　宗一。でも、2人のお母さんは別の人だけだね。可奈が7

月生まれで昴が9月生まれだから可奈が少しだけお姉さんかな」

「昴ちゃんはおわたしの妹なの?」

「同い年だから。俺と兄貴みたいに双子って感じかな」

「ノン、ほんとうなの?」

「俺が昴に嘘をついた事があるかな?　無いだろ」

「うん」

昴と可奈が手をつないで照れくさそうに笑っているがそれは姉妹だと言われて嬉しかったのだろう。

恐らくそれがどんな意味なのかなんて6歳では理解できないだろう。

「昴ちゃんのママってどこにいるの？」

可奈の言葉にその場に居た全員が凍りついた。

そこまで考えが及ばないと言うかまだ何処の誰かさえ判らない状況で名前すら判っていない。

思わず心の中で頭を抱え込んで『しくった！』と絶叫している俺が居た。

親父とお袋それに春菜まで俺に冷たい視線を浴びせている。

昨夜の親父の『家族なんだから』と言う言葉に頷いていたのは嘘だったのかと思ってしまう。

「わたし、ママなんて居ないよ。パパだけだもん」

昴の真っ直ぐな言葉で凍りついた空気がゆっくりと動き出した。

「昴ちゃんってパパとママと暮らしていたんじゃないの？」

「判らない。パパだけだもん」

それだけを言うと昴は俯いてしまった。

美紀さんが昴に聞いた質問は俺には怖くて昴に聞けなかった事だ。今まで聞けなかった事を後悔しても仕方がないがもっと早いうちに聞いておけばよかったと思う。

それに小笠原の兄貴の家で見たアルバムには兄貴と昴の写真はあったが昴の母親らしき影は何処にも無かった。

それはアルバムを見たであろう美紀さんと同じ認識で間違っていないだろう。

「昴ちゃん。ママがいなくてさみしくないの？」

「えっ、へいきだよ。だってわたしにはノンがいるもん」

可奈の直球に再び凍りつきそうになるが、そこには昴の嬉しそうな笑顔があった。

昴と可奈の前にしゃがんでいた俺は腰が抜けた様にその場に座り込んだ。

心の底から笑いが止めどもなく笑いが込み上げてきて腹を抱えて笑
っていて。
そして目からは熱いものがこぼれていた。

鳴海涼子

昴の母親の手掛かりを探すために実家から帰ってきたその日のうちパソコンを調べる事にした。

もちろんそんな事は昴の目の前で出来る訳もなく昴を先に寝かしつけてから。

まあ、危うく俺も一緒に寝てしまう所だったが。

兄貴のパソコンは俺が梱包した時と同じようにパソコンケースに入ってたままだった。

パソコンをケースから取り出すと手帳か何かがパソコンの間から落ちた、手に取るとそれは昴の母子手帳だった。

そして同時に昴の母親の名前が判った瞬間だった。

「しくった。何で島に居る間にパソコンを出して見なかったんだ」後悔先に立たずとは正しくこの事だ。

母子手帳を開けて見ると健診の結果や昴の予防接種の履歴などが書き込まれ。

昴の成長の様子が綺麗な字で細かく書き込まれている。

その履歴は初めのうちは都内の病院になっていたのに途中から小笠原の診療所に変わっていて小笠原で暮らしていた事が見受けられる。そして生まれたばかりの昴の写真があった。

眠っている時の口元がそっくりで自然に笑みがこぼれた。

「鳴海 涼子ってどこかで聞いたか見た覚えがあるな」

それが昴の母親の名前だった。

パソコンの電源を入れて立ち上げる。

しばらくすると画面にパスワードの文字が浮かび上がった。

兄貴と美紀さんの誕生日・携帯番号・昴や可奈の誕生日や名前を組み合わせ。

自分が思いつくだけのパスワードを入力するがロックは解除できな

い。

時間だけが無意味に過ぎていき畳の上に体を投げ出して伸びをする。「駄目だ。一卵性双生児の兄貴の事だから大概は判ると思っていたのに。それに電話して来た時にパスワードくらい教えておけよ。こんな事になるんなら今更だろうが。パスワード、暗号か……合言葉？ まさか」

それは俺と兄貴の2人にしか通じない言葉だった。

言葉と言ってしまったって良いものかと思うような子どもの頃に発していた音の羅列だった。

起き上がり音の羅列を口ずさみながら入力するとロックが解除された。

デスクトップにあるファイルを見てみるがどれも星の画像や天体観測や天体ショーの記録ばかりだった。

「まさか隠しファイルに」

オプションを開くと隠しファイル及び隠しフォルダーを表示しないにチェックがついている。

それを全てのファイルとフォルダーを表示するにチェックをして念のために再起動させる。

すると隠れていたファイルが姿を現した。

『プレアデスについて』と言うファイルをクリックする。

昴と言うのはカタカナで書くとか外来語の様な感じがするが牡牛座の中にあるプレアデス星団の和名の事だ。

そのファイルの中には昴と昴の母親である鳴海涼子について書かれていた。

涼子とは小笠原に転勤になった時に知り合った。

妊娠の所為か小笠原に着いた時にトラブルを起こし俺が身元を引き受ける事になった。

「って、おいおい」

涼子は昴に対して愛情がなかった訳ではなく表現の仕方が不器用だ

っただけで、それについては俺自身も彼女の性格に時々困惑する事がある。

その為か昴自身も涼子に対して心を開かなかった。

そして涼子と言う人は何度も小笠原と都内を行き来して都内で昴を産んでしばらくは都内で暮らしていたらしい。

それは母子手帳からも判る事だった。

その後の文章は殆どが昴についての事だった。

パツと見ただけでも昴の母親の連絡先などは一切書かれておらず判るのは名前だけだった。

「結局、判ったのは名前だけか。ん？ 待てよ」

涼子は写真を撮られる事を心底嫌がっていたが写真を撮る事は好きなようでコンテストなどには時々応募していたようだ。

そしてある日、涼子にかかってきた電話を境に涼子は昴の前から姿を消してしまった。

これを読んでいるのは恐らく典彰だろう。

どうか昴の事を頼む。

「馬鹿野郎！」

思わず時間を気にせずにテーブルに拳を叩きつけ叫んでしまう。
すると昴が起きてきてしまった。

「ノン、どうしたの？」

「起こしてしまってゴメンな、寝ような」

「うん」

昴を隣の部屋に連れて行き寝かしつける。

自分の布団があるにもかかわらず昴は俺の体にぴったりと寄り添うに寝るようになってしまった。

子どもの体温は高くかなり温かい。

まあ、これからの時期はお互いに寒くなくていいかもしれないがだ。
それにしても昴の母親の鳴海涼子って……

写真？ カメラ？

そこで兄貴の荷物を整理している時に見かけた写真集が浮かんでき

た。

その写真しゅうは沖縄の風景や町の人の何気ない普段の表情や笑い顔を撮影したものだったと思う。

写真集にあった名前が鳴海涼子だった気がする。

昴が再び寝付くのを待つて美紀さんに電話をしてしまった。

「義姉さん、こんなに夜遅くゴメン。探してもらいたいものがあるんだ」

「典彰君の頼みなら私は何時でも構わないけど、どうしたの？ そんなに慌てて」

「兄貴の荷物の中に写真集があったよね。その写真集を探してほしいんだ」

「ちよつと待つてちようだいね。宗一さんの部屋に片づけたばかりだから直ぐに取って来るわ」

「頼む」

電話口の向こうから美紀さんが動く気配がして小さなもの音だけが聞こえてくる。

そして『あつた』と言う美紀さんの声が聞こえてきた。

「あつたわよ、鳴海涼子さんって人が撮った写真集みたいだけど」

「やっぱり」

「典彰君まさか昴ちゃんの？」

「うん、多分間違いないと思う。それとこれは美紀さんの胸の内にしまっておいて欲しいんだ。実は……」

「そう、判ったわ。ありがとう」

自分のノートパソコンでネットを開いて鳴海涼子を検索すると都内のギャラリーでしばらく個展を開いている様だった。

どうすれば一番いいのか判らないが一つだけ言える事がある。

彼女が昴の母親かも知れないが俺は昴を置いて行った彼女の事を許す事をとうてい出来ないと言う事だった。

昴を保育所に送り届けて会社に行く途中でお袋に電話した。

「お袋か、実は昴の母親の事が判った」

「ええ、本当なの？ で、あんたどうする気なの？」

「あのな、殴り込みに行くとも思っているのか？ 何をしているのか判っただけで連絡先なんかはこれから調べるんだ。週末に実家によって昴を預けてからだな」

「判ったわ、ちゃんと報告しなさいよ」

「ああ、それじゃな」

お袋にそう言ったものの俺自身の中では踏ん切りがつかないままだったし、仮に個展に行ってもそこに必ず彼女が居るとは限らないからだ。

仕事モードに切り替え野田を連れ回って定時過ぎに退社して昴を迎えに行く。

最近では昴が何をしているのか気になりだして完全に親視線にシフトしてきている自分が怖い。

最近日は沈むのが早くなっている。

急いで昴を迎えに行く。

「昴ちゃん。お迎えが来たよ」

「はい、バイバイ」

最初のうちは俺の事をなんて呼んでいいのか保育士さん達も困惑気味だった。

『お父さん』『おじさん』『能登島さん』『沢渡さん』

どれもしつくりせずには最近では大人の対応らしくお迎えが来たとか言わないようになっていく。

周りに気を使わせているのが良く判るが現段階では現状維持でいるしかないのも確かだった。

「それじゃ、また明日ね」

「先生、バイバイ」

「失礼します」

昴と手をつないで保育所を後にする。

「昴、友達は出来たか？」

「うん。あっちゃんにまみちゃんにせいじくん」

「おお、せいじくんって男の子か」

「うん、ちよつとらんぼうだけど、はしるのがはやいんだよ」

「へえ、そうなんだ」

平静を装うけど乱暴な事をされていないかが凄く気になる。

まあ、何かあれば保育士さんから連絡がある訳だし気にするほどの事じゃないのかもしれない。

「あのね、せいじくん。おとうさんの事がきらいなんだって」

「どうしてだ？」

「よっぱらってぶつつていった」

世の中には女子どもに手を上げる男が居るのは事実だ。

だけどそれは家庭の事情ってやつで俺みたいな部外者が首を突っ込んで良い問題じゃない。

許しがたい行為だけど他人には全くの無力な世の中だった。

昴の母親を確かめに行くべきか悩んでいる間に週末は目前に迫っていた

2度

「昂ちゃんっていつもパパがお迎えに来るよね。ママは？」

「ママはいないよ。それにノンはパパじゃないもん」

「ええ？ じゃだれなの？」

「ノンはパパのおとうとで。でもママは知らないけどパパがおなじお姉ちゃんがいるよ」

「ええ、どういうことなの？ パパもママもひとりだよ」

「ほんとうだもん」

そこに男の子が近づいてきた。

「ばーか、俺なんかとーちゃんいらねえもん」

「せいじくん、そんな事をいつちゃだめなんだよ」

「うるせ！ 昂いくぞ」

「え、せいじくんってば」

そこに保育士さんが宥めに入るが保育所の庭は喧々囂々として収拾がつかなくなり保育士さんが頭を抱えていた。

「せいじくん、なんでパパなんかいららないの？」

「だってあいつは俺もかーちゃんもなぐるんだぞ」

「いつもなの？」

「ときどきだけだな。だからきらいだ」

パートナーの野田の失敗をフォローしていて普段より少しだけ昂のお迎えが遅れてしまった。

「はあ、はあ。昂、ゴメン。遅れた」

「おそいよ！」

「すいませんでした」

保育士さんに頭を下げると笑顔で迎えてくれる。

子どもが苦手な俺からすればまるで天使の様な人達だと思う時がある。

「まだ、聖司君のお迎えがまだなので、それにまだ時間内ですから」
「ありがとうございます。昴、帰ろう」
「うん」

俺達が帰ろうとした時に入れ違いでグレーのスカートスーツの上に
ベージュのコートを羽織った小柄な女の人が走り込んできた。

「すいません、遅くなりました」

「聖司君、お母さんがお迎えに来たよ」

「おせえよ、かーちゃん」

「ゴメンね」

「昴、いっしょにかえろうぜ」

「ノン、良いでしょ」

やんちゃそうな男の子の手を引いている女の人の顔を見て固まって
しまった。

彼女も俺の顔を見て顔を強張らせている。

俺が見間違えるはずがないし彼女の反応からも間違いないだろう。

昴が熱を出した時に旦那に殴られて気を失って一緒に病院に行った
彼女だった。

「ああ！」

「ええつ、あの時の？」

気まずい雰囲気と俺と彼女の間を漂っている。

昴と聖司は手をつないでお喋りをしながら俺達の前を歩いていた。

「あの治療費とタクシー代はお返しますから」

「えっと、別に良いですよ」

「良くありません。私は物乞いじゃありませんから」

「別にそういう訳じゃ」

逃げ出したい、それが本心だった。

あの時は2度と会う事なんてないと思っていた。

それに大事なお金を旦那に持ち去られたのを俺はこの目で見ていた
ので治療費と僅かなタクシー代を会計係の人に託した。

そんな2度と会わないと思っていた彼女に昴が通う保育所で再会してしまふなんて。

それにどうやら彼女の息子の聖司君と昴は仲が良いらしい。

ドラマなら運命的な出会いなんて言うんだがこれから俺はどの顔で会えば良いんだ？

「でも、聖司がいつも楽しそうに話す昴ちゃんのお父さんがあなただったなんて思いませんでした」

「まあ、俺は父親ですらないですから。昴は兄貴の子どもです」

「えっ？ お兄さんの？」

「ええ、9月に事故で他界しまして」

「9月ってこの間じゃないですか」

「まあ、そうですね」

「それであんなに慌てていたんですね」

「あ、あの時は本当にありがとうございました。何だかお礼を言いそびれちゃって」

気まずい雰囲気の中、立ち止まって誠心誠意頭を下げた。

「ノン、おいていくよ」

「先に行け、昴なんかに置いて行かれるほど遅くないよ」

「なあ、昴。なんでノンなんだ？ あいつ」

「あれ？ ノンってなまえなんだっけ？」

「あのな、昴。俺の名前を忘れた訳じゃないよな」

「えへへ、ノンのなまえは『さわたりのりあき』だよ！」

昴の言葉で今度は彼女が立ち止まって俺の顔をまじまじと見上げていた。

「あの、俺の顔に何か付いていますか？」

「え、だって昴ちゃんの苗字って確か能登島じゃ」

「ええ、兄貴は婿養子と言う形で結婚して姓が変わりましたから。

元は俺と同じ沢渡ですよ」

「そっじゃなくて。あっそれで私の顔を見たとき驚いていたんですね」

「はあ？」

「加賀谷 早苗」

彼女の口から飛び出した名前を聞いて俺の思考も体も止まってしまった。

そして2度と思い出したくない悪夢がフラッシュバックする。

彼女の口調が途端に硬くなった。

「な、なんでその名前を？」

「私の旧姓は入江です」

「まさか……」

「そのまさかだと思います。早苗ちゃんが良く話してくれていた沢渡典彰さんがあなただったなんて。確かに話に聞いた通り電信柱みたいに背が高くて目つきがちよつと悪いですけど。可笑しなものですね。でも、私はあなたを許せませんから」

「そうですね。あなたが早苗の従妹の未来さんでしたか。どうりで良く似ていると思いました」

「早苗なんて呼び捨てにしないでください！」

未来さんが憎しみを露わにして声を荒げた。

「かーちゃん、腹へった」

「ノン、はやく帰ろう」

「歩きながら話しませんか？」

俺と未来さんが立ち止まっているのにしびれを切らして聖司と昂が声を掛けて来てくれた。

それは俺にとつてありがたい助け舟だった。

「どうして早苗ちゃんに会いに来てくれなかったんですか？」

「言い訳にしか聞こえないと思いますが。あの事故から半年間の記憶が俺には無いんです。実はあの電車には師と仰いでいた先輩も乗っていて彼女と同じように帰らぬ人になりました。母から聞いた話ですが精神的な事から来る一時的な記憶喪失だろうと」

「大切なものを失ったショックで……」

「はい、半年ほどして記憶が戻った時には既に取り返しのかからない

事になっていましたよ。彼女の両親からは罵声を浴びせられ線香すらあげる事も許されず。彼女が眠っている場所を知ったのは1年くらい前の事です。会社でも自分が開拓した営業先は全て同僚に引き継がれていました。昴と会つまではそれこそ営業部のお荷物扱いですよ」

「私、何も知らなくて。ただ早苗ちゃんの婚約者が最後のお別れにも来ないって教えられて悔しくて」

「そう思われても仕方がない事です。全ては俺自身の弱さが引き起こした事ですから」

「昴ちゃんと会つまではって言っていましたよね」

「ええ、昴と暮らすようになってちゃんとしないとなんて今更ながら思ひまして。まあ再起動って感じですかね」

「大丈夫です。昴ちゃんを見ていればあなたがどれだけ頑張っているか良く判ります。親は子どもの鏡なんです。それに聖司も昴ちゃんと仲良くしてもらっているみたいだし」

「それはお互い様ですよ。昴は島育ちだからこっちの事は良く知らない事が多いんですけど色々と教えてもらっているみたいで」

「ええ？ 聖司にですか？ あんなに落ち着きがなくなつて手を焼いているのに」

少しだけ彼女の空気が和らいでいくのを感じる。

その落ち着きのない原因は父親にあるのではないかと思つたが、それは俺が口を出して良い様な事じゃないと飲み込んだ。

ただ、彼女が早苗の従妹だと判つた今は何かあれば力になりたいと思つた。

それが多少なりとも罪滅ぼしになればと。

「せいじ君、お母さんきれいだね」

「ええ、家じゃ。くそうるさいばあだぞ」

「もう、聖司！」

「また、げつようびだね」

「おう」

家の近所で未来さんと聖司と別れる。

あの時もこの先で出くわしたのだから彼女たちの家も近所なのだろう。

「ノン、せいじ君のおかあさんしっているの?」

「ああ、昴が熱を出した時に助けてくれたんだよ。聖司のお母さんだつて言うのは今日わかったけどな」

「ええ、おれいしないと」

「子どもがそんな事を気にしなくて良いの。俺がちゃんと言ったから」

「ああ、せいじ君のおかあさんきれいだもんね」

「あのな、あの人は結婚しているだろ」

「あつ、そうだ。でも、せいじ君おとうさんきらいだつて。ときどきぶたれるつていつてたよ」

「そうか、あいつも大変なんだな」

週末、俺は昴を両親に預けて都内のギャラリーの前に来ていた。

親父とお袋に行つてくると啖呵を切ったものの、いざ目の前になると流石に腰が引けてくる。

それに昴には何で休みの日にスーツ姿なのか突っ込まれてしまった。

「ねえ、ノン。デートなの?」

「でーと? そんな言葉どこで覚えて来るんだ?」

「保育園だよ。みーちゃんのおかあさんとおとうさんがデートしたんだつて」

「あのな、意味が分かつて使っているのか?」

「ええ、男の子と女の子がいっしょにでかけるのをデートってゆうんでしょ」

「まあ、広い意味じゃまちがってねえけど」

「ノンにはかのじょいないの? けっこんしないの?」

「いねえし、そんな予定はありません」

「なんだつまんないの」

「つまんない言うな！」

むきになっているとお袋に子ども相手にと窘められてしまった。昂に言われると何故だかマジで凹む。

それに万が一にでも彼女が出来たらそうするんだろう、俺。

モノトーンだった俺の家は徐々に昂カラーで浸食されつつあった。今じゃ台所には可愛らしいグラスや食器があり。

昔の木の踏み台もお袋が買ってきた可愛らしい水色の折り畳み式の踏み台に取って代わられ。

居間ですら昂が大好きな絵本や小物が増殖しつつある。

まあ、彼女なんて生き物が現れる気配なんて皆無で心配なんてする必要すら無用だ。

俺の人生にとってギャラリーなんて無縁の場所だと思っていた。

そんな俺が真つ白な壁に展示された写真を見ている。

このギャラリーに展示されている写真を撮った本人は居ないようだった。

俺自身、彼女の顔も知らないしネットで調べても兄貴が残したファイルに書いてあったように写真を撮られるのが嫌なのだろう本人の画像が皆無で何も判らず仕舞いだった。

しかし、こんな綺麗な写真を撮る事が出来る人が昂の母親だなんてどうしても思えなかった。

日本には同姓同名なんて何人いるかすら判らないのだから人違いであって欲しいと願った。

「へえ、なんだか真つ直ぐに訴えかけてくる写真だな」

それは『ワラビー』と言う題名が付けられた沖縄の子どもの自然な笑顔を切り取った写真だった。

その時、出入り口の辺りで雑誌か何かが落ちる音がする。

ギャラリーで写真を見ていた数人が音をした方に視線を向ける。

俺もその内の一人だった。

すると床にパンフレットの様な物が散乱して近くにいた人が拾い集めている。

そんな事を気に留めないかのように1人の小柄な女性が立ち尽くしていた。

そしてその女性の顔が見る見る歪んで泣きそうになる。

その顔はまるで小笠原に着き船から降りた時に泣きながら走り寄ってきた昴の顔と重なった。

「宗一さん？」

そう聞こえた気がする。

次の瞬間には女性は毅然とした表情になりパンフレットをかき集めている人に『後はお願い』と言って俺に向かって歩いてきて突然俺の腕を掴んで外に連れ出した。

俺の顔を見て驚き、次にとった行動から彼女が昴の母親に間違いがないと確信した。

ギャラリーから少し離れた喫茶店に連れ込まれてしまった。

「ご注文は？」

「俺はブレンド」

「同じ物を」

「畏まりました」

店員が会釈をして下がっていくと彼女が不機嫌そうにいきなり切り出した。

「あなたはいったい誰なんですか？」

「能登島 宗一の幽霊でも現れたと？ 俺は宗一の双子の弟ですよ」

「えっ、弟さん。宗一さんが確かそんな事を」

「あなたが昴の母親で間違いありませんね」

「は、はい。一応」

一応って何だ？

自分がお腹を痛めて昴を産んだのじゃないのか？

「実は今、昴は俺と暮らしています」

「そうですか、で生活費でも出せと」

「そんなつもりはありませんよ」

「それじゃ何で私の前に現れたりしたですか」

「あなたの口ぶりだと兄が亡くなった事を知っていますよね。昴の事をどう思っ言っんですか？」

「私は島を離れた時点で母親失格だと思っっていますし、あの子も私に心を開いてくれなかったからあの子にも会わない方が良く」と
何だろっこの感覚。

違和感と言っか昴がこの人と暮らしていたイメージが全く湧かない。イライラすると言っか無性に腹が立つ、兄貴が書いていた性格に困惑するとはこの事なのかもしれんない。

大人の様な発言をしたかと思っくと急に子どもじみた事を言い始める。そして時々自分の親指の爪を噛む癖があるようだ。

「昴の事が嫌いなんですか？ 大切じゃないんですか？」

「そんな事を言われても判りません」
判りませんってどういう意味なんだ、理解不能な言葉が彼女の口から紡ぎだされる。

見せるべきか悩んでいた昴の写真をテーブルに置いて彼女の前に押し出した。

「これ、最近の昴の写真です。俺の実家で遊んでいる時の」

「へえ、大きくなってる」

もうどうでも良くなってきた。

こんな人が昴の母親だったなんてこの場から一刻も早く逃げ出したかった。

昴の事を一番に考え母親の元に返すべきじゃないかと考えていた。しかし、こんな人ならちよっとの事で狼狽えている俺の方がマシに思えてきた。

急速に熱が冷めていくと完全に裏営業モードになっていた。

「あの、一つだけ確認させて下さい。俺が昴と暮らしていくことに異存はないんですね」

「構わないです。私は仕事の為に子どもを投げ出した女ですから」それは母娘に対する罪悪感が吹き飛んだ瞬間だった。

女子どもに手をあげる男は人間の屑だと思っ生きてきたが、この時ほど目の前の女を張り飛ばしたい衝動を抑えるのが大変だった。それと同時に俺が昴を育てていこうと決心した瞬間でもあった。

「最後にお願したい事が」

「まだ、何かあるんですか？ 忙しいのに」

「連絡先だけでも教えて頂けませんか。恐らく2度と会う事も無いと思いますし、子どもを投げ出すような人間に昴を会わせるつもりは毛頭ありません。でも一応あなたが昴を産んだ人ですから」

「判りました、これ」

彼女が1枚の名刺を取り出した。

それを受け取り俺の名刺をテーブルの上に置いて伝票を持って立ち上がった。

「貴重な時間を浪費させてしまつて申し訳ございませんでした。これで失礼させていただきます」

店内で暴れなかっただけで及第点だろう。

会計を済ませて一刻も早く彼女から離れたかった。

同じ空気を吸っていると思っただけで嫌悪感を覚え、喫茶店を後にしようとする後ろから2度と聞く事は無いと思っった声でした。

「あの、あの子の苗字はどうなるんですか？」

「はあ？ 昴が望まない限り能登島のままです」

「それじゃ可哀想じゃないですか。これから小学校に言つて保護者と違う苗字だったら虐めに遭うかも」

「俺は昴の事を一番に考えていきたいと思つています。だから昴が望まない限り変えません」

「そんな、まだ6歳の子どもに決めさすなんて」

「もう、6歳ですよ。大人と比べれば語彙が少なく上手く説明する事が出来ないけれど言葉を選んでゆつくりと丁寧に話せば伝わるんです。それに子供なりに心の中では結構難しい事を考えていたりす

るんです。だから俺は昴の気持ちを尊重したいと思うし大人の考えを押し付ける様な事はしません。子どもは親を選べないですから」

そう言い切って駅に向い歩きはじめ振り返る。彼女は背筋を伸ばして何かを振り切るかのように颯爽と歩く後姿が目に入った。

実家に戻り皆で食事をし昴を風呂に入れて寝かしつける。

台所の冷蔵庫から缶ビールを持って居間に向かった。

「ご苦労様。で、どうだったの？ 会って来たんでしょ。どんな人だったの？」

「母さん、そんなに矢継ぎ早に聞いたら典彰が答えられないだろう」
堪らず機関銃の様に質問攻めにするお袋を親父が制した。

「良く判らないって言うのが本当かな」

「そうよね。大体、あんな可愛い昴ちゃんを置いていく人だもんろくでもない人に決まっているわ」

お袋たちには悪いがあまり詳しい事を話さない方が良い気がした。

「一応、昴の事は心配していると云うか」

「男でも出来て逃げ出したに違いないわ」

「それは違うと思う。多分、俺の勘だけど」

「ノリに何が判るの？ 本人に聞いた訳じゃないんでしょ」

「まあ、そうだけど。俺だって営業で飯を食っているんだ。人を見る目はある方だ」

「そうね」

「それと昴の苗字をどうするのか聞かれたよ。小学校に行くようになった時に保護者と同じ方が良いんじゃないかって、そうしないと虐めとかって」

「それはお母さんもそう思うわよ。だって女の苗字なんて結婚すれば変わるのだから」

「ええ、そんな物なのか？」

「当然じゃない」

そついう事を彼女も言いたかつたのだろつ、まるで子どもの様に語彙が足りないのか。

「まあ、兄貴は結婚して男なのに苗字が変わつたけどな」

「驚いたのよ、いきなり宗つたら婿養子になつたつて言いだして」

「はあ？ 聞いてなかつたのか？」

「ええ、あんた知つていたの？ 何で教えなかつたの」

「まあ、兄貴もそのつもりだつたんだろ。教えれば反対するだろ」

「当然でしょ」

「向こつうの家が猛反対だつたからな、自分の両親にまで反対されなくなつたんだよ」

「あの子は優しいからね」

「悪かつたな、優しさのかけらも無くて」

「でも、あんたも丸くなつてきたわよね」

「歳だ、歳の所為！」

これ以上この場に居たら次に何を言われるのか目に見える。ビールを一気に煽つて昴が眠っている部屋に向かつた。

次から次へ

年末が近づいてくると営業部内も慌ただしくなってくる。

それは何処の会社も同じようなものなのだろう。

そして野田の営業成績は目に見えて伸び始め、それに追隨する様に俺の営業成績も上向きに方向修正出来てきた。

すると見下していた奴等が慌てだし課長からも発破をかけられ導火線に火がついたかのような感じだった。

中田先輩から見れば俺もまだまだひよっこ扱いされてしまうだろう。そんなひよっこが今や後輩に仕事を教えている。

何だか笑ってしまう。

そんな俺にはまた1つ悩みが……

「ん？ 昴。今日はどうしたんだ？ いつもくっ付いて寝ているお前が」

起きると昴が自分の布団で丸まる様にして寝ている。

体を起こして布団に手をつくると冷たいものを感じ布団をめくると世界地図が布団に書いてあった。

「うお、俺じゃないよな」

すると昴が起きだして俺の顔を睨みつけている。

流石の俺でもどんなに小さくても女の子にお前がしたのかなんて聞けるような心臓は持ち合わせていない。

「汗だな、汗。布団を干すから手伝え」

「汗なのに？」

「汗だからだよ」

渋々、昴が布団からシーツを外すのを手伝った。

ある晩は目を覚ますと昴が着替えをしていて、布団には世界地図が広がっていた。

理由が判らずネットで調べても諸説書かれていて意味が判らず困惑

気味だった。

社食でランチを食べていると熊谷さんが俺の前に座った。

「流石、中田仕込みの沢渡君は違うね。野田君の成績も上向きだし自信が顔に現れてきたよね」

「そうすか？ 元々あいつには力があつたんですよ」

「またまた、謙遜しちゃって。で、どうよ」

「まあ、ぼちぼちですよ。まだ何もかも始まったばかりで。そう言えば熊谷さんちのお子さんっておねしょしますか？」

「うん、まだ小さいからね」

「そうですね。実は昴もするんですよ、最近。本人も気にしているし調べても判らないことだらけで」

「そうだね。子どもって驚くくらい寝汗をかくけどこの時期には流石に無いわね。その分トイレの回数は増えるけど」

「あつそうか。俺も子どもの頃良く言われてました『寝る前にトイレに行けって』寒さの所為かな」

「着実に沢渡君も親になつてくね」

「まだまだすよ。それに時々夜中に夢を見たのか泣いてい時があるんです。そんな時はなんだか無力に思えて」

「そっか、お互いに大変だね。そんな時は優しく抱きしめてあげな、嫌な事が夢に出て来たのかもしれないから。それにさ、最初から親の人なんて何処にもいないんだから」

熊谷さんに言われて気付かされる。

親が子どもを育てる様に子どもが親を育て一緒に大きくなっていくんだと。

「そう言えば忘年会はどうするの？」

「無理すね、昴が居るから」

「もしかして煙草も止めてあれから飲みにも行っていないの？」

「ええ、もっぱら家飲みですな」

「ええ、忘年会に参加しようよ。私も子どもを連れて参加するから

さ。そうだ今年から子連れ忘年会にしよう。私が幹事に提案しておくから」

「それって熊谷さんが飲みたいだけじゃ」

「良いから良いからね」

熊谷さんが席を立つと入れ替わりに野田と野田の同期の奴が現れた。

「あの、今良いですか？」

「どうした」

「実は営業で困っている奴がいてアドバイスをもらえたらと」

「一応、聞いてやるけどトラブルは自分で何とかしろよ。そうしないと同じ事を繰り返すぞ」

「はい」

最近野田からの質問も増えたが他の営業から相談されることも増えてきた。

それはきつと良い方向に向いてきているのだろう。

「昴、寝る前にトイレに行って来いよ」

「行つたよ」

「あのな、す。あつ」

昴の髪の毛をドライヤーで乾かした後につでに自分の髪の毛もスリッパを入れた瞬間にブレーカーが落ちたのか家の中が真っ暗になった。

元々、爺さんが1人暮らしをしていた家でアンペアが少ないのか配線が古くなっているのか大雨が降ると時々落ちる事があったが気にしないで暮らしていた。

昴と暮らし始めて生活が変わってきているのを感じる。

「んー 一度調べてもらうか。昴？」

ブレーカーを上げに行くために立ち上がりうとして昴に声を掛けると無言のまま抱き着いてきた。

「昴、苦しいよ。もう少し離れる」

「いや！」

首に思いっきり抱き着かれたまま携帯の灯りを頼りに玄関先に向かいブレーカーを上げると直ぐに電気がついた。

「お前、暗いのが怖いのか」

「だって、まっくらでひとりはいやだもん」

目の前にいる昴が俺から視線を外して俯き顔が暗くなる。

兄貴は技師として天文台で働いていた、夜中に呼び出されて寝ている昴を置いて出る事があったのかもしれない。

それに近所の人に預けられた時も独りで寝ていた可能性もある。

そんな時に真っ暗な中で目が覚めたらどんなに不安になり心細いだろう。

「大丈夫だよ、俺が居るだろう」

「う、うん」

「それとお前、トイレに行つてないだろう。俺が使った時のままだったぞ」

「だって、こわいんだもん」

「毎日、俺がついて行つてやるから」

「う、うん」

「それとウソも無しだ。おねしょの事も気にするな」

「あ、あれは汗だもん」

「良いから聞け。昴はまだ小さいんだから気にする事は無い。まあ、体は大きいほうだけど可奈は昴より体が小さいけどもう大人の歯が生えてきている。皆と同じなんて事はないんだよ」

「ええ、おとなのはがはえるの？」

「そうだ、子どもの歯が抜けて」

「ええ！ はがぬけるの？」

再び昴の顔が強張った。

次から次へと色んな事が起き、その度に心が少し揺れる。

でも、こんな時は俺が落ち着かなきゃいけないんだ。

「ん」 体が大人になっていくつて事だよ」

「じゃ、わたしもノンみたいになるの？」

「ならねえよ。そうだな…… 昴は少しずつお姉さんになっていくんだ」

「ほんとうに？ おねえさんになるの？」

「ああ、遅いからトイレに行って寝るぞ」

「トイレにいつてもしちやったら？」

「乾かすだけだ。昴がおねしょなんてしなければ俺は殆ど布団なんて干さないからな」

「うわあ、ばっちい」

「ばっちい言うな。干してるだろう」

「えへへ」

昴が笑顔になりその笑顔を見るとホッとする。

小さなボートで昴と2人でこれからも大小様々な色んな波をいくつも越えていくのだろうか。

いつも風通りの静かな海なんてあり得ない。

どこの世界だって同じようなものだ。

「沢渡さん、最近はどうですか？」

「ああん、変わらねえよ」

「沢渡さんじゃなくて昴ちゃんですよ」

昴の事を聞かれる度に営業部の雰囲気が少しずつ柔らかくなっているのを感じる時だ。

家庭持ちの連中が昴の事を気にかけてくれている。

「大変だよ、おねしょしたり夜中に泣いたり」

「そつすよね。でもうちなんか英語を習わすって嫁が」

「はあ？ お前の子ってたしか」

「日本語もまだ覚束ないんです。でも嫁がバイリンガルだって張り切っちゃって。昴ちゃんには何か習わせないんですか？」

「そう言えば何も考えてないっていつか考え付かなかったっていうのが本当の所かな」

「嫁曰く、習い事は早いうちからが良いらしいですよ」

「そう言うもんなのかね」

確かに保育所に迎えに行くと他のお母さん達が色々と話をしているのを聞く事がある。

ピアノだのダンスだの水泳とか。

そう言えば俺が子ども頃は習字とか算盤とかあった気がする。

昂に習い事ね、毎日が精一杯なのにこれ以上は無理かも。

正直、他の親はどうしているんだろう……

すると課長に呼ばれた。

「沢渡君、今ちよつといいかね」

「はい、なんですか？」

「ここじゃちよつと」

「はあ」

使っていない小会議室に連れて行かれてしまう。

「あの、課長？」

「沢渡君は社内の噂を知っているね」

「ええ、まあ」

それはガラの悪い連中が会社の周りをうろついているらしいと言うものだった。

直接、何かをされた訳ではないらしいけど。

「実はね。今日1人の女子社員が私の所に相談しに来てくれてね。どうやら君の事を聞かれたらしんだ」

「はあ？ 俺の事をですか？ また、何で」

「その子の話では結婚しているのかや家族の事を聞かれたらしい。まあ、その子は怖くなって逃げ出して何も言わなかったらしいが」

「はつきり言わせてもらえば俺自身にも意味が分かりません。最近変わったと言うのは昂と暮らし始めた事くらいで。あつ」

「何か思い当たる事でもあったのかね」

「別に」

「彼女には決して口外しないように言ってるから」

「ありがとうございます。何かあれば直ぐに報告しますので」

「頼むよ。君もやる気を出して来てくれた矢先だからね」

「少しかだけ気になる事があったが確信があった訳ではない。」

「現時点では言うべき事じゃないだろう。」

周到

昴を迎えに行くとそこに聖司君のお母さんつまり未来さんが小走りで迎えに来た。

「こんばんは、あれ以来ですね」

「ええ、普段は仕事を中々抜けられなくて」

敢えて何も聞かずに普通に接するのが一番だと思う。

俺なんかに内輪の話などしてくれるとは到底思えないし、それは仕方がない事なのだと自分に言い聞かせる。

「そう言えば聖司君は何か習い事とかはしていないんですか？ あ、あの。同僚が英語を習わすとか今日言っただけで、他のお母さんなんかも習い事がどうのって」

全然、普通じゃねえじゃんか俺。

そんな自分が情けない様な恥ずかしい様な。

「うふふ、何も習わせていませんよ。保育園だけで精一杯で」

「あ、うちもす。あの、俺が精一杯で」

何だか急に感じが変わった気がする。

柔らかくなつたかと言うか、壁が亡くなったと言っべきか。

基本、女の人が苦手な俺にとってこの距離感は嫌な意味じゃなくて恥ずかしい。

「それに私の仕事の所為で聖司には我慢ばかりさせていて、私達が悪いんですけど聖司も無愛想な子に育ってしまった。中々友達ができなくて。でも、家では元気で明るい昴ちゃんの事を良く話してくれるので」

「で、どんな親なのかですか？」

「すいません。私ったら」

「構わないですよ。俺は親ですら無いですからね」

「そんな事はありません。ちゃんとした家族にしか見えません。うちなんか……」

彼女の瞳に光るものが浮かんでいる。

グツとくるものを押さえて大人の対応を心がける。

「何かあったんですか？ 例えば旦那さんの事とかで」

「そうですね。あんな所を見られちゃったんですものね。隠しても仕方がないですね。実は私の旦那は定職にも就かず毎日の様にお酒とギャンブルに嵌まって、逃げ出す度に見つかってしまつて。遠くに逃げれば良いんでしょうけれど聖司の事を考えるとそれが出来なくて」

結婚していてもこの人は独りで子どもを育て、子どもの事を一番に考えているのがよく判る。

世の中には酒とギャンブルや女に溺れる定番みたいな男は何処にでも存在し家族を苦しめている。

「そうだったんですか」

「それが今度は話し合いをしようって言われたんです」

「話し合いですか？」

「ええ、これから先の事をつて」

酒とギャンブルに溺れて奥さんや子どもを感情に任せて平気で手を上げる様な男が何の話し合いだ？

旦那の直ぐ後ろに黒い影が動いている様な気がする。

大体、俺の姿を見て逃げ出すような男が考えつく様な事は、彼女の旦那の事を何も知らない俺にでも判る。

「で、会うんですか？ 会つてどうするんですか？」

「出来れば別れてくれるように」

「出来ますか？ あの旦那さんを相手に」

「怖いけどするしか。そうしないと前に進めないんです」

昴と聖司君を見ると少し前を楽しそうに手をつないでお喋りをしてる。

この世界を壊す訳にはいかない。

「俺も同席させていただけませんか？」

「それじゃ。沢渡さんに迷惑が」

彼女の瞳が不安で揺れている。

それは他人を巻き込みたくないと言う事なのだろう。
言うべきでないと思った事を敢えて口にした。

「実は俺の会社の周りをガラの悪い連中がうろついて俺の事を聞いていたそうです」

「それで」

「多分、俺には他に原因が思いつきません。恐らく旦那さんは俺が通りすがりの男じゃないと思っているのでしょう」

「そんな、でも」

「それじゃ、もし未来さんと俺が逆の立場だったらどうしますか？」

「昴ちゃんまで、判りました。宜しく願います」

皆まで言うまでも無く理解してくれたようだ。

未来さんが俺に深々と頭を下げた。

2人の前を何も知らないで楽しそうに歩く無邪気な笑顔が唯一の救いだった。

あの後、連絡先を交換して別れ。

携帯でやり取りをし離婚を本当にするのか確認を取った。

そして話を詰めていく。

恐らく相手側も用意周到に準備している筈だ。

それに立ち向かうにはこちらもそれなりの準備をしなくてはいい。
いい。

場所と時間の指定、それに離婚するための書類作り。

それらを彼女に聞くと初めて聞いた言葉ばかりで戸惑っている様だった。

当然と言えば当然だろう。

離婚なんて結婚と同じで何度も経験する人なんて殆ど居ないのだから。

俺ですら兄貴が星になり昴と出会うまでそんな事は知らなかった。

養子縁組の仕組み。

親権とは。

それに至るまでの離婚の手続き等。

何に役立つか判らず漠然としながらも昴が大人になった時の事を考えて必死に調べた賜物だった。

神の思し召しか。

兄貴のおかげと言えば良いのか。

流石に今回は昴の友達とは言え男の子と一緒にお袋や親父に預ける訳にも行かず無理を言って美紀さんに預かってもらう事にした。

可奈も居る事だし何より昴が一緒なら安心だろう。

そして話し合いが拗れれば相手が暴力に訴え押し切られる可能性も否定できないと言うより相手は鼻からそのつもりなのかかもしれない。こちらでも対抗手段を講じなければ未来はないのだろう。

最悪の場合は昴にまで危険が及ぶ事になりかねない。

そんな事は絶対に許される事じゃないし俺が全力で阻止する。

携帯を取り出してこんな時には絶対に手助けしてくれる奴の番号をコールした。

「尚哉、久しぶり。若い奴の手を借りたい。数人で良いから。それとお前はいらなからな」

日時と場所を告げ近いうちに顔を出す事を約束する。

そして、彼女には決して感情的な発言をしない事。

俺に聞かれた事に対して明確に意思表示する事と念を押しておく。彼女が怯え取り乱せば相手の思うつばだと付け加えて。

こちらが指定した場所に時間どおりに向かう。

場所は自宅からは遠い郊外のファミレスだった。

駐車場は広いし何より見晴らしが良い。

天気も抜ける様な青空に真っ白い雲が流れている。

未来さんはお迎えの時にしているグレーのパンツスーツ姿でベージュのコートを着てこの間とは違う色のマフラーをしている。

俺もいつもと同じダークな色合いのスーツだが、弱冠ダークさをを

強調してみた。

そして俺のカバンの中には先日未来さんの診断書や数枚の書類と未来さんの署名捺印済みの離婚届が入っている。

未来さんの表情は緊張と恐怖心で強張ったままで仕方がないと言えはそれまでだった。

「大丈夫ですよ。聖司君のお母さん」

「はい」

「行きましょう」

俺まで緊張していれば話し合いどころではなくなってしまう。

笑顔で未来さんの肩を叩くと表情が緩やかになった。

ファミレスにはまだ先方は現れていないようだ。

とりあえず喫煙席に案内してもらった。

「どうして喫煙席に？」

「禁煙席は、ね」

広い店内の禁煙席を見ると週末と言う事もあって子ども連れの家族がランチを楽しんでいる。

最近はこの値上げや健康志向から年々喫煙率は下落していた。

それにファミレスでタバコを吸うのは外回りのリーマンが多い、俺もそうだった。

席についてしばらくするとあの晩に未来さんを殴り飛ばして金を持ち出した旦那と目つきの鋭いスーツ姿の男が現れた。

「ホットを4つ」

「ホットコーヒーを4つですね。畏まりました」

店員がハンディーに打ち込みをして復唱しお辞儀をして下がっていく。

「やはり、あなたが一緒でしたか。こちらとしても都合が良い」

それがスーツ姿のいけ好かない男の第一声だった。

「私は彼女のただの代理人みたいなもんですよ」

敢えて彼女の名前は口にしない。

見るからに裏の影をまとった男はこちらの口ぶりから2人の関係の近さを探ろうとしている。

「私はこう言うものです」

男が差し出した名刺にはコンサルティングやらいろいろな事が書かれているが、それを信用する訳がない。

「私の事はお調べになったみたいなので名刺を渡すまでは無いでしょう」

「さあ、何の事が判りかねますが」

「彼女の代理人の沢渡と申します。では本題に入りましょうか」
のらりくらりと核心を外しながら男が話を進めている。

要は旦那に多額の借金がありそれを肩代わりして高給な夜の仕事でもしてはどうかと言う事だった。

だがその実は彼女の骨の髄までしゃぶり尽くすのが狙いだろう。

今時にしては珍しい鉄板な話だった。

いかに相手が小物なのが良く判る。

しばらくすると喫煙席は見るからに強面のスーツ姿やジャンパー姿の男達で埋まっていた。

尚哉の奴、数人で良いと言ったのに恐らくお前はいらなと言った仕打ちがこれなのだろう。

その中には数人だけ見知った顔があるのを確認した。

周りの雰囲気は吞まれて未来さんがハンカチで額の汗を拭っている。見ると手が小さく震えていた。恐らく旦那の横にいる男の仲間だと思っっているのだろう。

そっと相手から見えないテーブルの陰で未来さんの手に手を当てる
と驚いた様な顔で俺をちらっと見た。

そしてこちらは相手の戯言を一切無視して一気に核心に向かって話を切り出した。

「彼女は借金を肩代わりする気など毛頭無いです。今日ここに来たのはそちらの旦那さんと離婚する為に出向いたのです」

旦那を見ると『えっ』と言う顔をしているがスーツ姿の男は全く動じていない。

当然、離婚の話になるだろうと踏んでいるのが良く判る。

「そんな事が簡単に出来る訳がないでしょ。ガキじゃあるまいし」

「別に構いませんよ。裁判を起こしてもそちらに勝ち目がないのは火を見るより明らかですから。これが先日、あなたが彼女に暴力をふるい病院に行った時の診断書と医師の所見の証明書のコピーです。それと医師の話では複数回の暴力を受けた形跡があると言う事で警察にと言われましたが彼女が問題を大きくするのが嫌だと断りました。最近は何院もDVに対しては大変協力的ですから」

本当のところ俺は昂の治療が終わると会計を済ませて病院を後にした。

彼女を診察した医者は恐らく昂を診察した医者と同じだろうが、複数回の暴力をうんぬんと言う話は聞いていないと言うより聞く事なんて出来る訳がない。

相手を揺さぶる完全なブラフだが隣に座っている未来さんは当然俺の嘘に気付いているだろう。

「貴様は一体何者なんだ？」

「ただのリーマンですよ。まあ営業の仕事柄色々だね。それとこちらの書類は彼女が受けた身体及び精神的苦痛に対する慰謝料の金額と息子さんの養育費についての書類です。確認願いますか？」

旦那の目の前に2枚の書類を差し出すと旦那が書類に目を落とした、恐らく金額を見ているのだろう。

それもこちらの狙い通りだった。

慰謝料はDVで離婚する際の平均的相場の300万。

そして養育費は月々いくらではなく金額を大きく見せる為に大学を卒業するまでの総額をわざと記載してある。

「こんなに払えるか！」

「いえ、お支払いただかないと困ります。こちらが裁判を起こせば僅差なくこの金額が確定すると思います」

「一体、どこまで」

狼狽える旦那を横目に男にも動揺の色が伺える。

こちらの思惑に一気に嵌めていく。

「私は弁護士でもありませんから。法律等の事を調べるのにも限度がありますので離婚協議書にそちらのサインと判をいただいて公正証書の手続きを取るくらいしか出来ませんから。最初に申し上げたはずですよ。ただの代理人だって」

相手がど素人だと確信したのだろう男の口元が緩んだ。

それは型に嵌まった瞬間だった、お互いに。

「舐めた真似をしてくれるじゃねえか。こんな物に名前なんか書けると思ってたのか？ さつさとこちらの言うとおりにしていれば親子共々痛い目を見なくて済むと言うのに」

「親子共々ですか。見るとそんなあなたにも家族がありそうですね」「何だと俺の女房子どもは関係ネエだろうが」

「そうですね、そちらが暴力的に問題を収めようと言うのならこちらにも考えがありますから」

落ちた、男が言わなくても良い自分の家族の事を口にした。

大きく息をついて男が付き返した書類を両手で整える。

そして左手を軽く上げて手首を軽く振り合図をする。

周りに座っていた強面の男達が騒然とし1人の黒っぽいスーツ姿の男が立ち上がりこちらにゆっくりと歩いてきた。

髪の毛は綺麗に後ろに流しその目つきは日本刀の様に切れている。

「兄貴、お呼びですか？」

「周りの迷惑になる。表で待ってる」

「判りました」

スーツの襟元の金バッジが揺れて男が日本刀の様な目で合図をする
と騒然とした男達は波が引くように表に出ていった。

ファミレスの窓から外を見るとピカピカに磨き上げられたスモーク
張り的高级セダンが数台並んでいた。

それを見た男がガタガタと震えだした。

「た、瀧川がな、なんで」

「おや？ 連中がどこの者かご存知のようですね。俺はあいつ等の元締めと不思議な縁で杯を交わした仲なんだ。俺が言った『家族』の言葉の意味が判るよな」

その後の話は流れる様に進んだ。

慰謝料や養育費なんて酒とギャンブルに溺れる人間に支払い能力が無いのは一目瞭然で、尚且つ借金を抱えていれば尚更だろう。

それは初めから未来さんに確認はしてあった。

彼女の願いは旦那の暴力から逃れ、聖司君と2人で静かに暮らす事だけだった。

離婚届にサイン及び捺印してもらい誓約書を書いてもらう。

今後一切、彼女と聖司君に係わらない事。

親権の話も簡単にクリアーして署名捺印させる。

「それじゃああなたに連帯保証人になってもらおうか」

「な、なんで俺が」

「あんたがこの話を持ってきたんだろう。連帯保証人にならなくても今後何かあれば根絶やしになる事は覚悟しろよ」

俺の言葉に男が力なく連帯保証人の欄に署名捺印した。

これで離婚届を週明けに役所に提出して授受されれば離婚が成立して彼女に静かな暮らしがやって来る筈だ。

「帰りましょう。未来さん」

「は、はい」

ファミレスを出るとあいづらが車の前で待っているのが見える。

そして後ろから元旦那と男が出てきて逃げ出すように車に飛び乗って走り去ってしまった。

あの元旦那にはこれから生き地獄が訪れるのは確かだろう。

それは自業自得と言うやつだ。

「悪い、ついでに駅まで連れて行ってくれないか」

「うす！」

スーツ姿の男が後部座席のドアを開けて待っていてくれる。

「乗った、乗った」

未来さんの背中を押して車に乗るように促し俺が乗るとドアが静かに閉められ車が走りだした。

しばらくして駅のロータリーに着き車から降りる。

「尚哉によろしくな。約束通り後から顔を出すから」

「判りました」

男に声を掛けるとその顔に日本刀の様な鋭さなど微塵も感じられない。

走り出す車から数人が笑顔で手を振っている。

後から尚哉達に何を言われるのか容易に想像が付き肩を落とした。

未来さんを見ると疲れ切った表情をしているがどこことなく清々しいような気がする。

「疲れましたね。大丈夫ですか？」

「本当に驚きはなしです、あんなに用意周到に準備していたなんて何で最初から教えてくれなんですか」

「敵を欺くには身内からって言うでしょ。常套手段と言う奴ですよ。暴力に怯えていた未来さんが落ち着き払っていたら相手だって不審に思うでしょ。でも上手く行って良かったです」

「本当に怖かったんですから。強面の人達に囲まれて、皆さん役者さんかなにかですか？ 演技が上手でしたね」

「あれ？ 聞いていませんでしたか。昔、元締めと不思議な縁で杯を交わしたって。あいつらは本業ですよ」

「本業って？」

「俺に呼ばれて来たのは……組の若頭でって、未来さん？ うわあ。た、タクシー！」

俺が大きな声で言えないので耳打ちすると未来さんの体から力が抜けて思わず抱きかかえてしまった。

何だかとても柔らかく良い匂いがするがそんな事を気にしている場

合じゃなかった。

彼女をタクシーに乗せ昴と聖司の待つ美紀さんの家に向かう。

「またかい？」

見覚えのあるタクシーの運転手に笑われてしまった。

忘年

会社の忘年会の日がやってきた。

場所は会社から数駅離れた大きな駅の前だった。

この駅は私鉄や地下鉄それにＪＲが乗り入れていて俺もこの駅で乗り換えして会社に行っている。

結構、この駅を利用してゐる社員は多い筈だ。

「沢渡君、今日は当然参加だよな」

「あつ、熊谷さん。昂を迎えてから顔を出します」

「会場はばっちり私が選んだからね」

「ああ、子連れ忘年会会場ですか？」

「そう、皆喜んでくれてたよ。特に女の子はね」

今まで子どもが居る女子社員が参加する事は少なかった。

それは子どももの面倒を見ないといけない為とそういう場所に子どもを連れていく事を躊躇ってしまうからだ。

俺自身も実際のところ居酒屋なんかに飲みに行き子連れが居るとこんな所に子どもを連れて来る親の気持ち判らなかつた。

でも、親だつて時にはストレスを発散できる場所が欲しい筈だ。

それでも酔っ払いが居る場所に昂を連れて行くのは正直考えてしまふ。

「遅くなりました」

「おお、沢渡い！ 遅いよ」

「うわあ、寄るな酔っ払い。昂が怖がつてゐるだろう」

案の定、昂は俺の脚の後ろに隠れてしまつてゐる。

忘年会会場は人数の割には広い座敷になつていて確かに開いているスペースで子ども達が遊んでいてこれまでにない雰囲気になつてゐる。

子どもたちが来ると言ふ事で誰かがおもちゃなんかを準備していた

みたいだ。

ねこ耳の力チューシャや小さなぬいぐるみなどで遊んでいるのが見える。

普段の飲み会には顔を出さない女子社員も楽しそうにグラスを傾けてお喋りに花を咲かせている。

すると熊谷さんが出迎えてくれた。

「昂ちゃん、初めまして。うお！ 何？ 何なのこの可愛さ加減は？ 本当に沢渡君なの？」

「あの、酔ってます？ 熊谷さん」

「素面よ、失礼ね。お世辞抜きにこんなに可愛い子だなんて思わなかった。昂ちゃん、こっちにおいで。ほら、沢渡君がエスコートしてあげなきゃ」

「あい、すみません」

テーブルに着くと俺の直ぐに目の前に生ビールが置かれ乾杯をする。

「お疲れ！」

「うーす」

「昂ちゃんは、オレンジジュースで良いかな？」

「はい、美味しいよ。たくさん食べてね」

「将来、有望だな。俺の息子の嫁さんに」

「コラコラ、沢渡君の顔が引き攣っているから」

水野課長は別格として家庭持ちの奴等は子どもの扱いが上手いのに気付く。

普段はギャルぽい格好をしている女子が昂に料理を取り分けてくれている。

何だか目から鱗って感じた。

それは昂が居なければ判らなかつた事だらけだった。

昂はと言えば一頻り料理を食べて小さな子ども達と遊んでいる。凄く微笑ましい姿に目に映る。

「おーい、沢渡君。お父さんの顔になってるよ」

「いや、なんだか保育園でもあんな風に遊んでいるのかなって」

「そっか、普段はあんまり保育所の生活って見ることが無いもんね。でも、昴ちゃんは小さい子が好きみたいだね」

「好きと言つか昴は小さな島で育ったからだと思います。島じゃ大きな子が小さな子の面倒を見るのが当たり前みたいなんだと。現に俺が島に行った時もそうでしたから」

「でも、お父さんが急に居なくなっただけ寂しくないのかな」

「それは寂しいと思いますよ。まして昴の父親と俺は瓜二つだし」

「そっか、でも昴ちゃんを見ているとそんな事を感じさせない沢渡君はもつと凄いとおもっよ」

「俺なんかまだまだすよ。戸惑う事ばかりで周りに助けられて。でもお蔭で視野が広がった気がします」

「よし！ それじゃ、その広がった視野でじゃんじゃん成績を伸ばしなさい」

「熊谷さんには敵わないな」

俺の背中をバシバシと叩いて他の席に移動してしまった。

宴もたけなわになっている、昴に声を掛けてから席を外す。

「昴、便所に言っただけ来るからな」

「もう、トイレって言っただけ。ノンのばか」

「すんまそん」

「あはは、沢渡が昴ちゃんに怒られてやんの！」

「うるへい！」

同僚にからかわられ睨みつけると周りがどつと沸いた。

そんな事すら少し前ならあり得ない事だった。

トイレを済ませ会場に戻ると会場の奥の方に暗雲が立ち込めていた。見るからに土砂降りの雨が降りそうだった。

「何だよ、沢渡ばかり」

「そっか、ちょっとばかり成績が上がったからって」

学校にもこんな奴らが居た気がする。

普段は成績の悪い奴を見下しているのに、そいつが上に上がってき
て注目を浴びると嫌味を言う奴ら。

何も変わらずに大人になってきたんだと思う。

そしてそんな態度をとる人間を熊谷さんは1番嫌っていた。

「何なの？ あなた達は自分のケツに火が着いたからっていい加減
にしないさいよね」

「俺らだって中田先輩についていれば」

「へえ」 中田君が怖いから厳しいからって逃げ回っていたのは何
処の誰でしたっけ」

「それはあいつが」

「それ、本気で言ってたんだ。 あんた達」

熊谷さんの口調が変わった。

現役バリバリの頃の熊谷さんの口調だ。

それは女だからなんて言わせない、男になんて絶対に負けないと言
う確固とした絶対に折れない真っ直ぐな芯からくるものだ。

それがあるからこそ周りの皆は一目置いていた。

「野田、ちよつと来な」

「は、はい」

熊谷さんに呼ばれ野田が恐る恐る腰を上げて席を立った。

「あんた達は1日どれくらい営業に回っているの？」

「アポなしを入れて15くらいですよ。 先方と会っている時間と移
動時間を考えたらそんなもんでしょ」

「野田、今日は何軒回った？」

「えつと23件です」

「聞いたか？」

「そんな無茶苦茶な」

「1日の目標をこいつらに教えてやれ」

野田が口ごもる様に渋々話をし始める。

「あの一応20件です。 最初に回る順番を組んで移動中にも近く
にある営業先に連絡を入れて顔をだして、アポが取れなくても出来る

だけ顔を出せつて先輩が。それと目標は無理だと思つても絶対に下げなつて」

「いい事を教えてやる。中田の出した1日の目標は30だ。お前らはある意味正解だよ、絶対に着いていけないし泣き言を漏らしていただろうよ。それともう一つ沢渡から引き継いだ営業先を返してみるか、あいつに？」

「何で今更そんな事をしなきゃならないんですか！」

「あの事故の後、とりあえず今は代理で良いから沢渡が復帰したら元に戻してくれて言つてきた取引先ばかりなんだ。それを復帰した沢渡が先方に頭を下げてお前らに引き継いだんだ。その上に胡坐をかいてきたくせに」

熊谷さんがヒートアップして言わなくても良い事を暴露してしまつた。

それは俺のためを思つての事だろうけどこのままじゃこの場が気まぐずい雰囲気呑みこまれてしまう。

仕方なく昴を呼んでねこ耳のカチューシャをつけてみた。

「おお、黒猫マノンの友達見たいだぞ。昴」

「ほんとう？ にゃん」

昴が嬉しがって手を丸めて猫の真似をしている。

少し色素の薄い昴の髪に茶トラのねこ耳が似合っていないかと言えば似合いすぎるほど似合っている。

『すまん、昴。出しに使つて』心の中で手を合わせ頭を下げる。

「ほら、熊谷さんに見てもらえ」

「うん！」

嬉しそうに熊谷さんに向かって昴が突進していく。

「進君のお母さん。にゃん」

「きゃーねこ耳、超可愛い！ 昴ちゃん。抱っこさせて。きゃー女の子って柔らかいし良い匂いがする。よーし飲み直すぞ！」

「熊谷さん、こっち向いて！」

「ああ、ずるい私も」

皆が携帯を取り出して昴を抱き上げた熊谷さんをカシャっていた。

「楽しかったね」

「そうだな、肩車してやろうか」

「ぶう、ノン。おさけくさい」

「そうかあ？」

「それによっぱらい。まっすぐあるかないとあぶないよ。て！」

「あーい」

あ後は昴のおかげで場の雰囲気は元に戻り良い感じでお開きになり2次会は昴が居るので遠慮した。

熊谷さんに叱責された奴らはどうするべきか自分で答えを出すだろう。

翌朝、二日酔いで俺が昴に叱責される羽目になってしまった

サンタ

街中はクリスマス一色に染まっている。

イルミネーションが光りクリスマスカラーの緑や赤のリボンが風に揺れている。

昴との初めてのクリスマスだと言うのにあまり普段と変わらなかった。

とりあえずクリスマスケーキなるものは予約してありプレゼントも隠してある。

昴を抱っこしながら昴が島に居た頃のアルバムを見ていた。

「これはね。 なっちゃんだよ。 でね、ここがジョンビーチ」

「へえ、綺麗だな」

しかし、何処を見ても母親の影すらない。

いや、待てよ写真を撮るのは好きだって兄貴は書いていたなって事はまさか。

「なあ、昴。 この昴と兄貴の写真を撮ったのって誰なんだ？」

「りょうこさん」

やっぱり、母親の写真が無い理由を今理解した。

慌てず普通に、あくまで普通にだぞ、俺。

「なあ、りょうこさんってどんな人だった？」

「んと、いつもこわいかおしておこっているの。 でね、ときどきふねにのってしらなくところにくの。 パパといっしょがいいのに。 だからりょうこさんはきらいなの」

彼女も昴が心を開いてくれないと言っていた。

一体なにがあつたんだ？

昴の問題か、または彼女自身の問題か。

考えられるのは後者の問題だろう事は直ぐに見当がついた。

それが不憫で兄貴は……

今となつては知る術も無かった。

「なあ、昴。今日はクリスマススイブなんだって、何が食べたい」

「チキン！」

「はあ？ チキン？」

「うん、あけてあるやつ」

「あ、ああ。テレビでやってる奴か。白いおじさんが出てくる奴」

「うん。せいじくんのいえもきょうはチキンって言ってたもん」

俺はアジの開きとかサンマの塩焼きって言われたらどうしようか
りアクションに困っていてホツと胸を撫で下ろした。

定番のチキンで良いのならお安い御用だった。

昴と買い物に行き予約したケーキを持って帰ってきた。

テーブルの真ん中にはケーキにフライドチキンが並びサラダや煮魚
と一緒に並んでいる。

未来さんも聖司と2人でクリスマスなのだろうか。

春菜はタフガイとデートだろう。

可奈は美紀さんと変わらずなのかな？

親父とお袋はクリスマスって柄じゃないか。

それぞれの家庭に楽しそうな明りが灯っているのを感じる。

そして今年からは俺の所にも。

しかし、殺風景な家の中だなツリーすら用意してやるのを忘れてし
まっていた。

それなのに昴の瞳はキラキラと嬉しそうだ。

「食うか」

「うん！」

ピンポン！

「誰だ？ チャイムの音なんて久しぶりに聞いたぞ」

小さな古い家なので玄関先で呼べば聞こえないなんて事はまずいな
い。

だから、俺の家に来る連中はチャイムなど鳴らさずに声を掛ける。

玄関に向かうとすりガラスの向こうに大きな赤い生き物が蠢いているのが見える。

思わず玄関に有った傘を握りしめ鍵を開ける。

「どちらさま」

「メリークリスマス！」

「うわぁ、何だ？」

俺より背は少し低いが横幅は倍以上もあるサンタクロースが現れた。

「だ、誰だ、お前」

メリークリスマスの声を聞いた昴が出てきてしまった。

「ああ、サンタクロースさんだ。あつ、はるなお姉ちゃん」

「えへへ、来ちゃった。典兄、脅かしてゴメン」

「春菜か。と言う事は…… サンタはタフガイが可哀想に」

サンタの陰からミニスカサンタの格好をした春菜が現れ、俺の言葉を聞いたサンタが目を拭っている。

来てくれた事に感謝はするがタフガイが不憫でならない。

不規則な勤務体制でデートすらままならず折角のクリスマスイブにこんな所にサンタの格好をさせられ連れて来られてしまっている。

2人きりでデートのプランでも考えていただろうに春菜に却下されたに違いない。

「ゴメンな、春菜が昴に会いに行くって言い切ったんだろ」

「……」

「ビールでも飲むか」

「はい」

「サンタクロースが泣くな。しゃんとしろ。それと、春菜もつとタフガイを大事にしろよ。折角のイブなんだぞ」

「その言葉をそのまま典兄にお返しします。ツリーも無いイブなんて信じられない。昴ちゃんをもっと大事にきなさい」

「すんまそん、来年は」

「来年じゃ遅いの。今年のイブは今日だけなんだから」

「あい」

するとタフガイが大きな体を丸めながら白い袋の中からクリスマスツリーを取り出して組み立て飾りつけを始めていた。

「うわあ、クリスマスツリーだ。サンタさんありがとう」

「くうっ、話には聞いていたけどめっちゃ可愛い。かなり来るかも」

「来るじゃないでしょ。昴ちゃんも一緒に飾り付けしよう」

「うん！」

昴マジックと言うべきかタフガイが知らない間に笑顔になってまんざらでもなさそうな顔をして、昴と春菜の3人で一緒に飾り付けをしている。

すると再びチャイムが鳴った。

「何なんだ今夜は」

玄関に向かうと昴が後ろからついて来て今度は小さな赤い生き物が玄関先で蠢いている。

「今度は誰だ」

「メリークリスマス！」

「親父なのか？」

「あ、おじいちゃんにおばあちゃん」

「昴ちゃん。はい、クリスマスプレゼントだよ」

「うわあ、ありがとう」

「あら、先客が居るの？」

「ああ、大きなサンタと小さなミニスカサンタが来ているよ」
居間に集まると異様な感じがする。

大きなサンタに小さなサンタ。

そしてミニスカサンタまで居る、どんだけ世界中にサンタクロースが居るんだよ。

「馬鹿だね。相手を思いやる気持ちの数だけサンタクロースは居るんだよ」

「それを俺は子どもの頃に聞きたかったよ、お袋」

「あら、そうだったの？」

「そうだったじゃねえだろ」

「変ね、のっぽのサンタさんが居てもおかしくないのにね」

「ええ、もう1人サンタさんがいるの？ おばあちゃん」

「居るはずよ。ね、ノリちゃん」

「お袋にちゃん付けで呼ばれたら俺がチキンになるわ！」

小さな家に大きな笑い声が上がった。

「す・ば・る・ちゃん」

「ああ、可奈ちゃんの声だ」

昴が玄関に飛び出して行き、小さな小さなミニスカサンタが美紀さんを連れてきた。

「ああ、サンタクロースがいっぱいだ」

「ごめんなさい典彰君。可奈がどうしても行くって聞かなくて」

「気遣い無用で。大勢の方が楽しいし、俺もどうして良いのか判らなかつたから」

「ありがとう」

皆からクリスマスプレゼントをもらった昴は大はしゃぎだった。

プレゼントはダブらない様に前もって俺の所に皆から連絡が来ていた。

「それじゃ」

「メリークリスマス！」

クラッカーが鳴り、何もなかったクリスマスが盛大なクリスマスになつてしまった。

これも全て昴のおかげなのだろう。

もしかしたら星の上の兄貴からのクリスマスプレゼントなのかもしれない。

翌日、昴が目を覚ますと枕元にリボンが付けられた大きな黒猫のマノンのぬいぐるみがあった。

「ノン、おきて。たいへんなの」

「あ、何が大変だった？」

「みてこれ」

昂が嬉しそうにマノンのぬいぐるみを俺の目の前に突き出している。

「あん？ サンタが来たんだろ」

「どうして、わたしが欲しいものがわかるんだろっ」

「さあな、サンタクロースだからだろ」

「ノンのところにはなにもないね」

「俺の所には来ないよ。俺は大人だもん」

「ええ、おとなになるとサンタさんこないの？」

「んゝ ちよつと違うかな。来る人もいるか。でも俺の所には来ないの」

「ええ、ノンがかわいそう」

「可哀想言っな」

「じゃ、わたしがあげる。チュッ」

突然俺の頬に柔らかい何かが当たった。

頭の中が真っ白になりそのまま布団の上に倒れ込んだ。

いつの間にか俺の所にもサンタは来ていた様だった。

ランドセル

正月は実家に集まるのが沢渡家の習慣になっていた。

兄貴ですら島に転勤してからも必ず正月は戻ってきて美紀さんと可奈を連れて実家に行っていた。

それと春菜に至っては自分の家にいるよりも俺の実家に居る確率の方が高かった。

そんな場所に例年なら俺の姿は無かった。

それは正月に出かける奴らの気がしれないからで、それは実家に戻る事ばかりではなかった。

「今年は帰って来るんだろうね。昴ちゃんを連れて戻ってきなさいよ」

「ええ、しんどいから良いよ」

「何を言ってるの、あんたは本当に親不孝だね」

「悪かったな」

そんな俺が今年に限り実家に向かう電車に乗っていた。
まんまとお袋の策略に嵌まったからだ。

「ノン、おじいちゃんとおばあちゃんちに行こう」

「ええ？ 正月に？」

「うん、おいしいおまめやおもちがあるって」

「行きたいのか」

「うん」

食べ物に釣られた昴に押し切られてしまった。

「ノン、みぎだよな」

「ああ」

「はやく、はやく」

実家の門が見えてくると昴が俺の手を振り切って走り出した。

「昴、時々車が来るんだぞ。走るな」

「はい、おばあちゃん、おじいちゃん」

「あら、あら。昴ちゃんよく来たね。あら？ ノリは」
「あそこ」

ため息を付くと昴に指を差されてしまった。

「そんなに嫌ならあんただけ帰りなさい」

「良いのか？ 帰って。知らねえぞ昴に嫌われても」

「そ、それは困るわね」

街よりも数段寒い気がして居間の炬燵に入り体を丸め暖を取る。

街の方が温かく感じるのはヒートアイランド現象の所為だろうか、そんな事を考えていると首筋に冷たい物が押し当てられた。

「うわあ、な、何だ」

「えへへ、ノン。ミカン」

「あのな、心臓が止まるかと思っただろ。最近は情け容赦ないなあ」

昴が俺の横で炬燵に潜り込みミカンの皮をむき始めた。

「ほら、貸せ」

「うん」

蒂の付いた方からミカンの皮をむき始める。

確かこうすると白い奴があんまりくっつかないはずだ。

「ほれ、むけたぞ」

「ありがとう」

「何だか仄々するね」

「何を親父は爺くさい事を言っているんだよ」

「何をつて現に爺ちゃんだからね」

「まだまだボウリングなんかして元気なくせに」

「まあ、可奈と昴が大きくなるまではね。そう言えば昴と可奈は春には小学生だね」

「先の話だよ」

そこにお袋が料理をしていたのか、ひと段落ついたお袋が現れた。
「何を言っているの。ランドセルとかは決めたの？」

「いや、未だだけど」

「あんたね、早くしないとブランド物なんかは無くなっちゃうんだよ」

「ブランドって普通ので良いだろう」

「駄目よ、女の子なんだから。昂ちゃんはどんなランドセルが良いんだい？」

「らんどせる？ わかんない」

「もう、ノリがちゃんとしなから」

「へいへい」

「お父さん、パソコンを持ってきてちょうだい」

「はあ？ パソコン？」

お袋に言われた親父がいそいそとノートパソコンを持ってきた。

どうして実家にパソコンが？

実際のところ誰が使うんだ？

「お父さんがねボウリング場の予約とかサークルの仲間とかの連絡に使っているの」

「信じられん、携帯すら使いこなせてないのに。この型の古いパソコンは何処から？」

「春菜ちゃんが使ってないパソコンがあるからって。全部やってくれたの」

「まあ、見たところ中身が殆ど空だからネットやメールだけなら十分だと思うけど」

「ほら、ノリ。ランドセルよ、ランドセル」

「へいへい」

ネットを開いて人気のランドセルを調べてみると確かにブランド物が存在するようだ。

俺らの時代は色も赤と黒の2色だけでかなり重かった記憶がある。

時代が変わるところも変わるものなのかと実感しきりだ。

色もカラフルで無い色は無いんじゃないかと思える。

中には花柄のランドセルまであった。

「最近は色が選べてオリジナルっぽい奴まであるのか。ブランド物はつて9万？ 原付が買えるぞ」

「うわぁ、かわいいのがいっぱいあるね」

そこに美紀さんと可奈がやってきた。

「今年もよろしく願います」

「はい、はい。堅苦しい挨拶は抜きにして楽にしてね」

「昂ちゃん、なにを見ているの？」

「ランドセルだよ」

「わたしも見たい」

「それじゃ、可奈がここに座れ。でこれでこうしてここを押すんだ。判ったな」

「「うん」」

横にずれて可奈を座らせ昂にマウスの使い方を教えると直ぐに使いこなし始めた。

いつもながら子ども吸収力には驚かされる。

まるで水を吸収するスポンジみたいだ。

「昂ちゃんも小学校なんだね」

「まぁ、まだ先ですけどね」

「でも典彰君もすっかり板についてきているみたい」

「それもまだまだすよ」

結局、昂と可奈のランドセルはお袋達が買ってくれることになり早々と2人を選ばせてネットで注文を済ませてしまった。

どんな物が届くかは教えてもらえなかった。

届いてからのお楽しみだそうだ。

喪中と言う事でお節は無いが煮豆や餅を用意してくれている。

それと兄貴と俺が好きだった豆腐を焼いて甘辛く味付けをしたものがあつた。

「うわぁ、懐かしいな」

「あんたが毎年顔を出さないからでしょ。毎年作って待っているの

に」

「年末年始くらいのにびりさせてくれよ」

「会社でものにびりしているくせに」

「もう違うよ。お蔭でボーナスもそこそこあったからな。少しは生命保険の事とか考えないとな」

「あんた、未だそんな事を言ってるの？」

「俺だって忙しいの。色々あんだよ。だけでもう無茶は出来ないよな、昴が居るんだし」

「そうね、ちゃんとしないとね」

「典彰君はちゃんとしていますよ。いつも一番に昴ちゃんの事を考えているし、それにね」

「ああ、あの人は違うから」

「そうなの？ うふふ」

美紀さんが言っているのは未来さんの事だろう。

誤解されると困るので釘を刺しておく、お袋が勘ぐっていたが強引に振り切った。

「ノン、なんだか歯がいたい」

「歯が痛い？ どこだ？ あーんして」

昴が口を開いて指で奥歯を触っている。

「良く判らないな」

「どれどれ、おばちゃんに見せて」

「うん」

美紀さんが俺の代わりに見てくれた。

「虫歯じゃないみたいだけど、一番奥の歯に固い白い物がついてるの。それが歯茎に当たって赤くなっているみたい」

「ノリ、大丈夫なのかい？」

「俺に聞いても判らないよ。正月明けに歯医者に連れて行くよ。昴、そんなに痛いのか？」

「ゆっくりかめばへいき」

「それじゃ、後で歯医者に行こうな」

「う、うん」

まあ、実家に来ればそれでんびり出来るのだが決まって結婚だの孫だの言われるのがどうにも苦手で遠のいてしまっていた。

つい缶ビールに手が伸びると昂の冷たい視線が注がれる。

「まだ、2本目だ。正月休みなんだから飲ませろ」

「3ばんまで」

「へーい」

これではどちらが大人か子どもか判らない。

「そう言えば春菜はどうしたんだ？」

「あら、今年は未だね」

「電話してみるか」

「春菜ちゃんだって忙しいのよ」

「毎年顔を出していたんだろ」

「まあ、顔を出してくれなくなったらそれはそれで寂しいけれど」

「だろ」

春菜に電話すると喪中と言う事を気にしていたようだ。

直ぐに玄関が開き居間にやってきた。

「ああ、可奈ちゃん達も来てたんだ。早く来ればよかった。今年もよろしくね」

何だか普段よりテンションが高い気がするが敢えて聞かない。

春菜ももう子どもではない。

大人になれば大人なりの悩みがあるのだろう。

寄りかかってきた時に手を差し伸べてやれば良い。

クリスマス同様、賑やかになりそうだ。

正月が開けて直ぐに歯医者に行くために半休を取った。

これから行く歯医者は周りの連中に色々話を聞いたうえで決めた、子どもに優しい歯医者だと評判の所だった。

しかし、歯科医院に入るとあの特有の匂いがした。

「ノン、いたくない？」

「少しは痛いかもしれないけどずっと痛いままじゃ嫌だろ」

「う、うん」

「大丈夫だ、俺がついている」

昂にそう言ったものの目の前で昂の歯を削られたら見ていられないかもしれない。

誰も一度は経験しているあの痛さが蘇り背中がゾクゾクする。

何だか俺の方が緊張してきた。

「6歳臼歯に腐骨が付いているみたいですね」

「腐骨ですか？」

「ええ、顎の骨ですよ」

先生の言葉を聞いただけで血の気が引いていく。

「麻酔をして取り除きましょう」

「お、お願いします」

昂が握っている手に力が入る。

先生がピンセットで小さな脱脂綿何かをつまんで昂の口に入れ薬を塗っているようだ。

そして治療が始まる。

「取れましたよ」

「は、はい？ 昂、痛くないか？」

「うん、ぜんぜんいたくなかった」

あまりにも呆気なかったので気が抜けてしまう。

昂の口の中を見せてもらうと奥歯の歯茎に小さな穴が開いていて少しだけ血が出ているが問題ないと言われてしまった。

「自然に穴は塞がりますし腫れも引いてくるはずです。それと6歳臼歯はこれから他の乳歯が大人の歯に生え変わる為に非常に大事な歯ですからお父さんがきちんと歯磨きチェックをしてあげてくださいね」

「あの。もしもですよ虫歯になったりしたら」

「最悪な場合は歯並びが悪くなります。もし時間が御有りになるの

ならこの後に歯磨き教室があるので参加されてみてはどうですか？」

「宜しく願います」

受付で待っていると数組の親子が現れて歯磨き教室が始まった。

最初はいかに歯が大切かと言う事を子どもにも判るように絵を見せながら説明してくれる。

そして歯磨きのポイントを細かく教えてもらった。

「昂ちゃんには虫歯は無いようですから気を付けてあげてくださいね」

「はい」

「ノン、おわりなの？」

「終わりだよ。夜ご飯も少し柔らかい物にしような」

「うん」

その晩から昂の歯磨きチェックが始まった。

昂が磨き終わった後で磨き残しが無い様に俺が磨いて仕上げをする。

何だろうこの感覚はくすぐったい様なそれでいて寂しい様な。

今まで感じた事のない感覚だった。

これが普通の親が感じているものと同じなのだろうか。

今はとても愛おしく感じるが成長すれば必ず親から離れていく寂しさを同時に感じてしまうのかもしれない。

春菜

昴と出会い一緒に暮らすようになって半年が過ぎようとしていた。お袋にせつつかれて昴と2人で昴の勉強机もとい学習机を見に来ていた。

「うわぁ、かわいいのがいっぱいだね」

「昴が選ぶんだぞ」

「わたしがえらんでいいの？」

「良いよ、だって昴が使うんだから」

「どれにしようかなぁ。まよっちゃうね」

「時間はいくらでもあるからな」

そして財布の中もいくらか余裕があった。

それはお袋達が昴のランドセルを買ってくれたからで、ボーナスもそこそこだったの少しは貯金してもまだ余力があった。

目移りしていた昴の動きが止まり机の引き出しを開けたりしている。それは白とピンクを基調とした女の子が好きそうなデザインで、所々にキラキラ光るビーズがあしらわれていた。

どうしても子ども目線で選ぶとこのラインになってしまつのだろう。親達としてみれば長く使える物を選びたいのが信条だろう。

大人まで……魔法の言葉を口にしてみる。

「なぁ、昴。もう少しお姉さんみたいなやつが良いんじゃないか？」

「ええ、おねえさんみたいなやつ？」

「そう、あっちにある白木ぽいのとか」

「みてる」

俺が指差すと昴が一目散に走り出しゆっくりと後を追いかける。

「走るなよ」

「うん」

すると落ち着いた感じの木で作られたシンプルな机の前に昴が立っていた。

「このクローバーのがいいな」

「ん？ クローバー？」

見ると背板の真ん中が四葉のクローバー型にくり抜かれていた。引き出しの数や大きさも良い感じだし、大人の俺が手について揺らしてもしつかりとしたつくりになっている。

それだけに値段もそれなりにだけど中学・高校と使えたら安い買い物なのだろう。

「これで良いのか？」

「うん、これがいい！」

「しかし、クローバー大好きだな」

「うん」

店員を呼ぶと取り寄せの商品で少し時間がかかると言われてしまうが昴が選んだものが1番良いのは変わらないので購入を決める。この時期の商品なのだから小学校の入学までには届くだろう。

「アジ、サンマ、クローバー。アジ、アジ、サンマ、クローバー」

昴が嬉しがってあの歌を歌っているがクローバーが増えている。

それは俺の実家に行った時に四葉のクローバーを見つけた時からだった。

「昴、はやく帰らないとあれが始まるぞ」

「ええ、ノンいまなんじ？」

俺が時間を言っていると俺の手を掴んで引つ張って歩きだした。

「はやく、おわっちゃうよ」

「へーい」

急いで家に帰る。

でも何で毎週欠かさずにしなければいけないのかが俺には理解できなかった。

「ノン。はやくかぎあけて」

「そんなに急かすなよ。ん？」

その時、庭の方から歌が聞こえた気がした。

「庭に誰か来ているのかな。あつ昂！」

俺の制止も聞かずに昂が庭を覗き込んだ。

「変な人だったら」

「あ、はるなお姉ちゃん」

「えへへ、来ちゃった」

庭でしゃがんで何かを覗き込んでいたのは春菜だった。

「ああ、ノン。いそいでいそいで」

「へいへい」

「何をそんなに急いでるの？ あ、トイレでしょ」

「ちがうもん！」

玄関のかぎを開けた瞬間に昂が家の中に飛び込み、テレビのリモコンを手にとってスイッチを入れてチャンネルを変えている。

丁度番組が始まった所の様だ。

「ねえ、典兄。何かあるの？」

「あれだよ、春菜も見た事がある筈だぞ。みんなといっしょ体操」

「みんなといっしょ体操？」

「ノン、はやく！」

春菜に説明をしていると曲が聞こえてきてテレビの前に行き昂の横に並んだ。

曲に合わせて前ならえをして向きを変え同じ動きをする。

昂が手を横にするのを俺がしゃがんで避ける。

今度は俺が手を横にすると昂が頭を抱えてしゃがんだ。

そして手を叩きあい、腕をぶつけ合って深呼吸をする。

「みんなといっしょたいそう。おわり」

昂の掛け声でホツとため息を付いて腰を下ろすと昂は直ぐに手を洗いにいきうがいを始めた。

「ノンもだよ」

「へい」

「それじゃ、お姉ちゃんも」

3人並んでうがいを始める。

ガラガラ

コロコロ

カラカラ

3人3様の音がする。

体操をして保育園で言われている帰ったら手洗いとうがいを済ませると昴はテレビを消して絵本を読み始めた。

春菜が勝手知ったる我が家と言う感じで手際よくお茶を入れてくれて2人でお茶を飲み始めた。

「典兄もすっかりお父さんだね」

「そうか。昴の事はなんとなく判ってきたけど他の子どもはちょっとなあ」

「でも、昴ちゃんは凄いな。ちゃんとテレビを消して本を読んでいる。それに庭のあれってなあに」

春菜が庭にある小石で丸く囲ってある所を指さした。

「ああ、あれは昴が種を蒔いてるんだよ」

「種？ 何の？」

「桃とか梨とかブドウもあったかな。最近、昴のお気に入りの八百屋を見つけて時々果物を買って来るとその度に『芽でるかな』って自分で埋めて毎日水をやってるよ」

「凄いね昴ちゃんって」

「そうだな。昴は少し何でも自分でしなきゃって言う気持ちが強い見たいだからな。島で育った所為か兄貴が忙しく働いていた所為か」

「典兄も忙しそうだもんね」

「あのな、俺はバタバタしているだけだよ。それと来る前に電話くらいしろ」

「だって、家出してきたんだもん」

「家出？」

「声大きいよ。昴ちゃんに聞こえちゃうでしょ」

「あのな、6歳児に家出なんて難しい言葉が判る筈ないだろう」

「まあ……」

それっきり春菜は湯のみを両手で持ったまま俯いて何も言わなくなつてしまった。

「しょうもない奴だな。しばらくここに居ろ。どうせ俺の所に来たと言ふ事はタフガイは勤務なんだから」

「うん、他の基地で訓練だつて。こんな時には傍に居てよね、馬鹿」
「で、家には？」

「置手紙してきた。しばらく帰らないつて」

「そつか、仕方がない晩飯の買い物にでも行くか」

「うん。昴ちゃん、3人でお買い物に行こう」

「ええ、3にんで」

「そつだよ」

「いく！」

駅前のスーパーに向かう。

近くにもスーパーがあるのだが品揃えが全く違うし、駅前の方が近くに色々な店があるので都合が様くこの界隈の人はたいいてい駅前まで足を延ばしている。

自宅から歩いて15分ほどなので運動にも丁度いいかもしれない。

スーパーの籠を持ち何にするか考えながら歩くが何も浮かんで来なかった。

いつもなら昴に何が食べたいか（主菜はほぼ魚）を聞いて決めるのだが今ここに昴はいない。

春菜と2人で店内を探検に行つてしまった。

そして主婦もどきの格好で主婦が毎日頭を悩ませる事と同じ事を考えていた。

後ろの方から昴の声がした。

「はるなお姉ちゃん。どうしたの？」

不思議に思い振り返ると春菜が慌てふためいて俺に向かって昴の手を引きながら向かつてきた。

「何をそんなに慌ててるんだ？」

「あ、あの、ね」

「落ち着いて話せ。幽霊か何かでも見たのか？」

「そ、それぞれ」

「アホ、未だ外は明るいんだぞ」

「だ、だつて」

「沢渡さん」

聞き覚えのある声があると春菜の体が角材みたいに硬直してギリギリと音を立てながら振り返った。

「ああ、未来さん」

「この間は本当にありがとう御座いました。おかげさまで無事に」

「そうですかそれは良かったですね」

何故だか凄く輝いて見える。

それは身の回りが落ち着いて安心して過ごせるからなのだろうか。

何はともあれ一段落と言う事なのだろう。

「ああ、ノリ。けっこうんしたのか？」

「するか！ こいつは従妹の春菜だ」

未来さんの後ろから顔を出した聖司が大声でとんでもない事を叫び、それを打ち消すくらいの声で否定すると周りの視線を浴び失笑されてしまう。

「ノン、はずかしい」

「す、昴まで……」

昴にまで冷ややかな視線を浴びせられている。

「あ、あなたがもしかして妹分の春菜ちゃん？ 私ってそんなに似ているのかしら。だから私の顔を見て逃げ出したのね」

頭が落ちてしまうのではないかと思うくらいブンブン音を立てて春菜が頭を縦に振っている

「あのな、春菜。頼むから恥ずかしい事をしないでくれ。お前ももういい大人なんだから」

「私は加賀谷 早苗の従妹にあたる入江未来 いりえみらい です」

「ええ、早苗さんが話してたそっくりな従妹って」

「私です。そう言えば沢渡さんも私の顔を初めて見た時に驚いた顔をしてましたもんね」

「すみません」

未来さんが笑いながらそんな事を言う。

思わず頭を掻いてしまった。

すると未来さんが春菜に何かを耳打ちしている。

「典兄ですか？ 私の正義のヒーローです」

「かーちゃん、めし」

「はいはい。それでは失礼します。昂ちゃん、バイバイ」

「バイバイ。せいじくんまたね」

「おう」

未来さんが頭を下げ聖司と一緒に歩き出した。

昂が腰の所で恥ずかしそうに手を振っている。

「綺麗な人だね。早苗さんにそっくりで」

「何が言たくて、誰が正義のヒーローなんだ？」

「別に」

「彼女はそんなんじゃないよ。旦那と離婚したばかりだよ」

「そうだったんだ。それにしても未来さんってスタイルが良いんだね。子どもが居るなんて信じられない」

「そうか？ 普通じゃないのか？」

「もう、典兄は女の人になると鈍感なんだから。女の目は鋭いもんなんです。間違いなく子どもを産む前と同じ体型を維持しているね」

「俺の事は放っておけ。それより誰かさんは甘酸っぱいやつ見たいだぞ」

「え、ええ！」

俺が昂を見ると春菜が驚いてしゃがみ込み昂の肩に手を置いた。

「昂ちゃん、あの男の子の事が好きなの？」

「うん、すき。はしるのはやいから」

「うわぁ、今時の子って典兄の頃と大違いだね。誰かさんなんて好きな子の背中に虫を入れて苛めてたもんね」

「男は大体似たようなもんだ」

「そうなのかなぁ」

「タフガイに聞いてみる」

「え、う、うん」

俺が彼氏の事に触れると途端に春菜の顔が曇った。
今夜は長くなりそうだ。

「典兄の肉じゃがが食べたい」

「肉だな、よし！」

春菜の一言に思わずガッツポーズをしてしまった。

「まるでお肉を食べさせてもらってない子どもみたい」

「肉ねえ」

遠い視線になつてしまう。

「まぁ、昼は極力肉系で行くけどな。夜のメインは魚だからな」

「ええ、ずっと」

「まぁ、毎日？」

「信じられない健康体じゃん」

「やっぱ肉だよな」

「おさかながいい」

「行くか」

「うん！」

スーパーで買い物を済ませ駅前商店街の昴御用達の魚屋にむかう。

と、遠くから店主が手を振っているのが見える。

「どんだけお得意さんなの？」

「まあな」

「おっ、今日も可愛いね昴ちゃん。今晚はどれにする」

「きょうはどの子にしようかな」

昴が氷の上に綺麗に並べられた魚達を真剣な表情で見ている。

「あの子！」

「鰭かい？ 痺れるね昴ちゃんの目利きには。今日一番の上物だよ」

「それじゃ3切れね」

「ええ、あ、昴ちゃん、誰？」

店主が俺の横にいる春菜に気付き俺に聞かずに昴に小声で聞いていた。

「あのね、はるなお姉ちゃん」

「ええ、お姉ちゃん？ 若いのに大した」

「従妹です」

「なるほどね」

拳を掌に落とす店主を見て春菜が横でクスクス笑っている。

昴御用達だから来るけど1人じゃ絶対に来たくない店ナンバー1になった。

春菜が娘に見える俺って……

家に帰り夕食の準備をする。

七輪に火を入れその間に魚の下ごしらえをする。

酒・しょうゆ・みりんと魚屋でもらった柚子の輪切りを入れたタレに鰭を漬け込む。

その間に肉じゃがを作り始める。

「鰭はどうなるの？」

「幽庵焼きだな」

「へえ、典兄って料理出来るんだ」

「まあな、独り暮らしは半端無いくらい長いからな」

横では踏み台に乗って昴がサラダを千切っている。

「昴ちゃんもお手伝いするんだ」

「うん、ノンがしてもいいって」

「へえ、上手だね」

「えへへ、ノンはもつとじょうずだよ。ノンのつくったごはんおいしいよ」

春菜に鍋を任せ七輪で鰯を焼き始める。
しばらくすると春菜が声を掛けてきた。

「典兄、出来たよ。そっちは？」

「もう少しかな」

何度かタレを付けながら裏返す。

縁側には良い匂いが立ち込めている。

「寒いから中に入ってる」

「う、うん。グリルで焼けば良いのに」

「その魚のプリンススがそんな事を許すと思うか？」

「本当に昴ちゃんが1番なんだね」

「当たり前だろう」

「そっか」

春菜が呆気なく部屋に戻っていくのを思わず目で追ってしまう。

「うわぁ、焦げた！」

「いただきます」

3人で手を合わせてご飯を頂く。

食事はテレビをけして必ず家族で話をしながら食事をする。

それが昴流と言うか兄貴の流儀だった。

「おいしいね」

「うわぁ、本当に美味しい」

「あのな」

「だってグリルだって同じだと思っていたんだもん」

「まあ、遠火の直火で焼くからな。ふつくと焼き上がるんだよ」

「へえ」

春菜が感心しきりで鰯を口に運んでいる。

「ノリ、これもおいしいね」

「あのね昴ちゃん。典兄の肉じゃがは絶品なんだよ」

「そうなの？」

「うん、これを食べたなら他の肉じゃがなんて食べられなくなっちゃ

「うから」

「褒め過ぎだ。何も出ないぞ」

「私は食に関して嘘は付きません」

「まっ、良いだろ」

「うわあ、反応薄っ！」

わいわいと食事をして春菜が昴を風呂に入れてくれた。
お蔭で久しぶりにゆっくり風呂に浸かれた。

俺が出てくると昴は眠そうな顔をしていた。

「はるなお姉ちゃん、おやすみなしゃい」

「うん、おやすみ」

部屋で昴を寝かしつける。

昴が寝てからもしばらく傍に横になって春菜の事を考えていた。

「寝た？」

「ああ、昴の机を買いに行ったから疲れたんだろ」

「典兄もご苦労様」

「そんなたいそうな物じゃないよ。俺のは」

「それが普通なんだね」

「それと家に電話しておいたからな」

「何でそんな事をするのよ。折角……」

「折角なんだ？ 両親に心配かければお前はそれで良いのか？」

「だって」

春菜が頬を膨らませ不服そうな顔をして俺を見上げている。

「それにおじさんやおばさんが俺の事をなんで信用してくれている
と思う」

「そっか、そうだよな。何かあった時は必ず典兄が父さんか母さん
に連絡してくれたもんね」

昴を寝かしつけて部屋の戻ると春菜は台所の入り口に腰を下ろして
いた。

まだ炭が燻っている七輪を持ってきて炭を突つつくと直ぐに赤くな

った。

何も無いよりは少し暖かいだろう。

七輪が目の前にあるのだからと冷蔵庫からシシャモを取り出して網の上に並べると香ばしい匂いが立ち込める。

仕舞ってあった日本酒をグラスに注いで春菜の前に突き出す。

「私は……」

「良いから、氷を入れるか？」

「いらない。典兄は日本酒のロックなの？ 水ぼくなっちゃうよ」

「良い酒は氷を入れても美味いんだよ」

「あれ、凄くこの日本酒って喉越しが良いよ」

「良い酒だって言っただろ。課長からもらった極上ものだよ」

「そうなんだ」

春菜と俺の間に沈黙が流れる。

何も春菜が言わなければ俺にはどうしてやる事も出来ないし、俺からはどうしたんだとは聞かない。

自分の中では答えが出ている筈だ。

それでもどうしようもない事の方が多い。

「美味しい物なんて時々少しだけで良いんだよ。人生だってそんな物だ。時々感じる幸せがあるから歩いていける。常に美味しい物を食べ続ければ更に上のモノを望む。今まで美味しいと感じていた物に慣れてしまう。幸せだってそう、慣れてしまえばそれが平坦な日常になってしまう。そして失った時にしか気付くことが出来ない。美味しかったんだ、幸せだったんだと。爺さんの受け売りだ」

「典兄……」

「おじさんとおばさんにタフガイとの結婚を反対されたな」

「どうしてそんな事？」

「正月に紹介したんだろ。でも両親は良い顔をしなかった、違うか？」

「お見通しなんだ」

その後の言葉を飲み込んだ。

横に座る春菜の瞳からは光るものが止めどなく溢れ出していた。

「何がいけないの？ 何の仕事なら安全なの？ 海自は危険だからって、もしもの事があつたらって。そんな所に嫁には出せないって私…… 典兄…… 悔しくて、何も言い返せない自分が悔しくて……」

春菜が俺の胸に顔を埋めて泣き崩れてしまった。

今は優しく抱きしめる事しか出来ない。

どれくらい泣いていただろうしばらくするとフツと春菜が顔を上げた。

「何だか泣いたらすすきりした」

「そうか、明日俺がおじさんに話をしてみるよ」

「ありがとう」

細い指で春菜が涙を拭っている。

すると後ろの引き戸が開いて昴が眠そうに目を擦りながら起きてきてしまった。

「ノン、おしっこ」

「ほいほい」

昴を後押しする様にトイレに連れて行く。

戻ってきて春菜の横に座ると昴が部屋に戻ろうとしなかった。

「昴、寝ないと起きられないぞ」

昴が首を横に振って愚図り始めてしまった。

「仕方がないな、ここに来い」

「うん」

昴を抱っこして足の間に座らせると俺の方に顔を向けて丸くなり寝息を立てだした。

「うふふ、昴ちゃんの寝顔って可愛い。それにどれだけ典兄を信頼しているのかが良く判る」

「まあ、俺は夫にも父親にもなったことが無からな。でも何とかなるもんだって思うよ。まだまだこれからだけどな」

「大丈夫、典兄なら」

「その自信はどこからくるんだ？」

「あつ、もし彼女が出来たらバツイチでもないのに子連れ結婚になるのか」

「あのな春菜それだけは言わないでくれって言うより昴の事で精一杯で彼女とかなんて考えられねえよ」

「うわあ、30にして枯れちゃってる」

「それに昴と飯食ってた方が楽しいしな」

「既に終わってるよ」

「枯れてるとか終わってるって言うな」

「だって昴ちゃんが成人したら典兄は」

「……泣きそうだから言わないでくれ」

久しぶりの春菜とのお喋りは夜更けまで続いた。
まるで高校時代に戻った様だった。

「ノン、おきて。けいたいがなってるよ」

「あい。頭痛つ、飲み過ぎた」

「けいたい」

「はいよ」

昴が目の前に突き出している携帯を見ると春菜の親父さんからだった。

大きく息を吸ってから携帯を受けとり通話ボタンを押した。

「おはようございます。春菜ですか？　ここに居ますよ。多分まだ帰らないと思います。どうしてって言われても原因はおじさん達が一番判っているんですよ。僕の話聞いてからもう一度考えてください。早苗は会社員だったのに電車事故に遭って帰ってきませんでした。兄貴は技師だったのに足場の下敷きに遭い帰らない人になりました。海自は危険な所ですか？　サラリーマンなら安全なんですか？　どんな仕事をしていても先の事なんて誰にも判らないんです。だからこそ今の幸せを大切に歩いていくんじゃないんですか？　このまま彼のもとに行き春菜が帰ってこなくても良いんですね。」

今の僕ならそうさせます。春菜には愛する人と幸せになつて欲しいから」

電話口の向こうでは春菜の親父さんが黙っている。

そしてもう一度会うからと言ってくれた。

一息ついて携帯を切った。

「春菜、タフガイに電話してもう一度おじさんとおばさんに会わせろ。あいつだつてそう簡単にお前を手放すような男じゃないだろ。思うがままに前に着き進め」

「うん！　ありがとう」

春菜は一頻り泣いた。

それは昨夜の悔しい涙とは明らかに違うはずだ。

俺はそう信じてる。

「やっぱり典兄は私の正義のヒーローだよ」

そう言い残して一段と輝きの増した笑顔で帰って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1172y/>

アジとサンマとクローバー

2011年11月18日05時50分発行